第一幕

第一場――シュヴァルツヴァルト

エリーゼ:　あなた、ビールはいかが？

　ハシバミの刺繍が入った頭巾の脇からクリーム色の毛を垂らし、小首をかしげて地ビールを注ぐ妻。ボトルは十六世紀の初頭にイギリスでコルク栓が発明されて以来、それまでの陶器や金属や木材、そして動物の皮に代わって現代でもおなじみの緑色のガラス瓶が採用されるようになった。ただし初期の容器は球体で、縒った柳で編んだかごに入れて用いられるのが通常だった。決して平らとは言えないテーブルに置かれ、しかも彼女がその時だけ人が変わったように大胆な注ぎ方をするので木製の凡庸なタンブラーは思わぬ期待を寄せられてバカになった機械のように揺れている。

キーファ:　ありがとう、エリーゼ。

　鈍色に染まる手を伸ばして杯を受け取る夫。こちらも髪の色は明るく瞳の色はブラウン。両者が共に横着をして中腰で応対したためにまるで崖にしがみつく妻を救出するかのような大げさな受け渡しになってしまう。
前掛けに染みついた静物画からテレピン油の甘い香りが舞い上がる。

　厚い皮を剥くと姿を現すライチのような輝かしい季節の始まり。エナメル質の光が草原に無数の粒となって散らばり、集落にうっすらと降り積もり、そして一枚皮の稜線にくっきりとした輪郭を与える。
　固く手を取り合って陰鬱さを耐え忍んでいたドイツトウヒも

　この時ばかりは解きほぐれて本来の白い木肌を覗かせる。朽ち葉色の地とも強いコントラストをなす影の部分からさえむしろ温かさや陽気さを感じられるほどである。さらに見上げるとそこにはブナにも引けを取らない鮮やかなリーフグリーンの樹冠が広がっており、ほとんど広葉樹林と見紛うばかりに美しい。
　これには森中が歓喜し、天を讃えるあらゆる香が唱歌が鐘がそして虫たちが行き交った。われらが画家一家も新参の住人としてこれに与ろうと絵筆と供物をもって灰色がかった日常空間を飛び出した。

エリーゼ:　さあこれでいいわ。
　　ねえ、どうかしら。なかなかの傑作だと思わない？

　ボトルの位置も決まり、最後の仕上げに頭上の枝葉から面白がって落ちてきたアリを払って彼女の幸福な仕事は完了する。テーブルには早朝からかまどをフル稼働させて焼いた八の字にしたブレッツェルと旬のサクランボのタルト、そしてツグミのように山小屋とアトリエの間を何度も往復して運んだソーセージやハチミツ、牛乳のチーズ、ザワークラフト、森で採れたベリー系のジャムなどおよそ家の中にある食料を全部出してきたのではないかと思われる品々が並び、かつ絵画的に配膳されている。
　彼女も風変わりなマイスターに影響を受けた夫についてここフェルトベルクへ移住してからまったく冬が無かったわけではない。しかし「子はかすがい」と云う様に息子が大きくなってすべてが好転した。彼女自身に話相手ができたことは言うまでもないが、それ以上に夫に劇的な変化が起きたのだ。
いわく、「絵画化された日常世界に再び生命が吹き込まれた」らしく見る物触れる物すべてが新鮮で愛おしく、聖別された物ように感じられるという。その崇敬は彼の実母たるエリーゼにも及び、ために二人はまるで生まれ変わったような気持ちで定められた結婚生活を営み始めたのである。

キーファ:　(興味津々に振り返って)　ああ、すごく綺麗だ！　正しくエリーゼの色彩だね。

エリーゼ:　でしょ。今日はタルトがすごくうまくいったの。
フィリングの透明感のある発色といい、生地の焼き色といい、完璧だわ。

ご機嫌に夫の肩に手を添えて改めて自分の作品を見直す。

キーファ:　君のセンスにはいつも助けられているよ。
なんたって君には生命を生み出す力があるんだからね。

エリーゼ:　そこまで大げさな評価は望まないわ。

キーファ:　いいや、本当さ。男にあんな完璧な作品は逆立ちしたって創れやしない。
君は素晴らしいよ。

これに感動したエリーゼは添えられた手に彼の愛を感じながら
キスをする。

エリーゼ:　――また少し陽が高くなってきたわね。私これくらいの明るさの時が一番好きよ。ほら、草花が身体いっぱいに日差しを吸い込んで内側から輝いて見えるでしょう？

キーファ:　君の肌の産毛のように？　僕もそれを表現するのはすごく好きだ。
でも今度の作品はルーベンスとはちょっと違う。

エリーゼ:　まさか！　創造力豊かな都会人じゃあるまいし。
木々はまさに彼が描く女神たちのように輝いているじゃない。

キーファ:　ごらん、これは森に迷い込んだ子が親切な妖精たちに励まされて光を目指す場面をイメージしているんだ。・・・女神の森だと却って迷い込んでしまうだろう？

エリーゼ:　(身を乗り出して)　――素敵！　これは私たちの愛しい子を描いてくれたのでしょう。なんて幻想的なんでしょう！

　そうね、確かにこの森は暗くなくてはならないわ。それは妖精が輝くための暗さだから。星が瞬くためだったり、乙女のうるんだ瞳がキャンドルの明かりを反射してキラキラして見えるようにするための暗さだわ。

　(少年の顔を指さして)　ほら、この子の目もこんなにキラキラして！
右手は胸の前でオジギソウのように閉じているし、カエデのような左手は却って触れた木を驚かしているけれどその眼はまっすぐ前を見据えている。
――それにしてもこのトウヒもとてもチャーミングね。

キーファ:　子どもにとっての冒険ってそうだろう？　大人たちが遠巻きに見遣ればおとぎ話でなければ取り上げられないようなささやかな出会いや発見の連続が彼らの目線で見ればそれは過酷な運命を背負った英雄の物語さながらで、果敢にも未知なる道を突き進んでいく――。彼らほど勇敢な者は無いよ。

エリーゼ:　それじゃこの妖精は私ってことになるわね。あなたも子どもの頃は私が手を引いてあげなければ近くの林にも入って行かれなかったんですからね。それが今では山小屋住まいの森の画家さん。私に感謝してよね。

キーファ:　今の僕があるのはみんな君のおかげさ。エリーゼがいてくれれば僕はどこにだって行ける。愛しているよ。

　鼻先をくっ付けてさらなる愛を確かめ合う二人。
そこに上手側からサクサクと軽快に草を踏む少年の足音と
はちみつ入りのミルクのような甘くて白い声が割り込む。
「パパ―！　ママ―！」

エリーゼ:　(軽く唇をかみ、上目遣いになって)　私たちの天使が帰ってきたわ。
何か光を見つけたのかしら。きっとあなたにとってもそうである何かよ。

キーファ:　僕はこれ以上を望まないよ。あの子が触れる物は何だって輝いて見えるのだから。

エリーゼ:　まあ、それは困った人ね。私たちの幸福な生活を守るためには、あなたには少しくらい貪欲でいてもらわないと。

子どもをたしなめるようにおでこにキスして離れ、
再びかけられる声に応じる。

はいはい、聞こえてるわ。——まあまあ、あんなに笑って。笑顔が顔からこぼれ落ちそうよ。頬もさくらんぼのように真っ赤に熟しているわ。

——見て、左手に何か持ってる。あれはキアゲハかしら？　ほら、一心にあなたに見せようとしているわ。はあ、なんて健気で可愛らしいんでしょう！

キーファ:　ほんとうだね。まったく足元を見ないで駆けてくる。まるで操り人形だ！

エリーゼ:　(息子を迎えに行きながら)　ほらほら、足元に気を付けて！
あなたは余りに実を揺らし過ぎるわ。

キーファ:　うん、二本の小枝がしなりにしなって地面から引っこ抜けそうだ。

と愉快そうに実況しながら目を凝らすが、彼に息子の愛らしい顔は見えない。ついに妻の愛しい背中にすっぽり隠れてしまってその姿さえ見失ってしまう。
そうこうしている内に息子が転び、驚きと傷つけられた自尊心の痛みから泣き出すと、エリーゼは息子を励ましに上手の袖へ消えてしまう。

彼は反射的に解き放たれたキアゲハが舞い上がるのを目で追った。それが天に溶けてふいに見えなくなったと思った刹那、雷が唸り出し、黒雲が立ち込め始める。太陽はあわてて天へ還り、雲の上へと避難する。

キーファ:　これは一雨来そうだ。
エリーゼ、ピクニックは中止だ！　パイを早く家へ運んだ方がいい。
僕は画架を持って一足先に帰るから。——急いで！

次の瞬間、滝のような雨が降り出し、彼の聴覚と視界を奪う。再び名を叫ぶが彼女たちは彼を振り返ろうとしない。
とそこへ雨のカーテンの向こうに滲むランプの明かりが近づき、そして彼らをキーファとは反対の方向へ導いていった。
キャンバスを抱きしめてずぶ濡れになりながら懸命に明かりの行方を追うキーファ。ただし足は一歩も動かない。頭が混乱して動けないのだ。徒に叫び続ける。
・・・やがて明かりが宙に固定されると馬のいななきがして馬車が走り出す。耳鳴りが雨の音をせき止め、遠ざかっていく蹄の音だけが聞こえた。

キーファ:　(震える声で)　エリーゼ、何処へ行くんだ･･･？　そっちへ行っては駄目だ！
君のいるべきはそっちじゃない・・・。戻ってくるんだ、僕の所へ。
エリーゼ！　エリーゼ——！

再び雨の音が彼の叫びを掻き消し、一瞬の暗転。
内幕を開くとそこはハプスブルク家領トリベルクにあるヨハン・フリードリヒ・ファブリの居城のグレイト・ホールで、観客はこれまでの情景がキーファの白昼夢であったことを知る。
エントランスからダイレクトに見ることのできる壁面に足場が組まれ、二三四×三一八センチメートルのフレスコ画が製作中である。自然光は吹き抜けの窓からちょうど画面に向かって差している。そしてエリーゼが配膳したテーブルの周りでは二人の徒弟ニコとマテウスが骨粉で処理を施したオークの板にシルバーポイント(銀筆)でデッサン中。

足場の上からマイスター・ヴァンデルの檄が飛ぶ。

ヴァンデル:　よーし、そろそろ追い込みに入るぞ！　みんなしっかり今日の分を描き上げてくれ。

ニコ:　(デッサンを中断してマテウスにも促し)　マテウス、時間だって。僕たちも助手に専念しよう。

マテウス:　(生返事)　ああ。もう少し・・・。

ニコ:　親方に叱られても知らないぞ。
・・・キーファ？

ヴァンデル:　ええい！　ニコ、何だこの群青は！　発色は粗いし、不純物が多すぎる。農民の作業着を塗るんじゃないんだぞ。アズライトを磨る時は気品をもって取り掛かれといつも言ってるだろう。・・・今週の給金は無いものと思え。

ニコ:　(速やかに抗議して)　群青を練ったのはマテウスです！　僕じゃありません。彼は自分には高級な顔料しか似合わないと言ってアズライトとクリムソン・レーキとオーピメント(雄黄)しか磨りません。上塗りに使う漆喰を捏ねたのも僕一人でした。彼は自分のデッサンの時間を稼ごうとしてそう言っているのです。それに僕がイエローオーカーを磨っている横で彼が氷でも砕くように乱暴にアズライトを削り、ガシガシとすり潰しているのを見ました。叱られるべきは彼です！

ヴァンデル:　(不満そうに口を歪ませて)　いいや、それは兄弟子であるお前の責任だ。お前がマテウスにちゃんと顔料の磨り方を教えてやればあいつも自分がいずれ使うことになる絵の具をそんな風に扱ったりしなかっただろうし、気付いたお前がその場で磨り直していれば俺がこうしてお前を怒鳴りつけて時間を無駄にすることもなかった。見過ごしたお前が悪い。

さあ、新しい筆をよこせ。くだらない口答えをする暇があったら抜け目なく仕事をしろ。

パレットを拭った絵筆を足場の下に差し出して、芸術家特有の射抜くようなまなざしを向けるヴァンデル。その手は幾重のペンだこが固まって硬質化し、長年の絵の具が染みついて青銅像のような質感に見える。彫刻のように角張った顔、灰色の瞳、

赤い鼻、髪の毛より長くそり返った金髪のひげ、そして苔むした老木の幹のようになった黒の前掛け。それらは彼こそがこの工房を取りまとめるマイスターであることの確かな根拠と彼の画家人生の誠実さを物語っていた。
　彼の右腕のペーターもニコもそんな彼に絶大の信頼と尊敬を抱いていたので――ニコにあっては畏怖を――、理不尽な物言いにも敢えて反感を抱くことはなかったし、自惚れがちなマテウスにいたっては木板の陰で左の口角を上げてこれに憧れさえ抱いていた。

ニコ:　・・・すぐに磨り直します。(新しい筆を取って伏せ目がちに渡す)
　(それからマテウスに傍白)　聞いたろう、磨り直しだってさ。

マテウス:　(振り返りもせず)　君こそ。君が代わってくれよ。僕は今手が離せないんだ。
　それに良い作品を仕上げるには良い材料を揃えた方がいい。

ニコ:　だったら顔料くらいちゃんと磨れよ。　・・・これは貸しだからな。

ヴァンデル:　(助手に目を遣って)　ペーター、違う！　その黒雲はもっとダイナミックに、禍々しく！　指を使うんだ。こう手首をひねって、火炎の中からフェニクスが舞い上がるように。ブリューゲルの『死の勝利』を思い出せ！

　――おいキーファ！　お前は何をぼさっと突っ立ってやがる、さっさと持ち場へ戻りやがれ！

巨大な空間に彼の大声が響き渡る。

ペーター:　空をまだ暗くするんですか？　これ以上暗くしたら宇宙との境界が無くなってしまいますよ。彗星はコバルトブルーの裂け目から現われるんですよね？

　彼はヴァンデルとの打ち合わせと下絵の状態から引き裂いた綿のような雲と泥の付いた靴で踏まれたような空をイメージし

て黄土色を掠れ塗りしていたが、日に日に冴えわたる彼の想像力について行けなくなり、ついに重い口を開いたのだった。
　ちなみに彼らは元ミュンヘンのビア・ボーイと客の間柄でヴァンデルの遍歴修業時代に出会って以来、かれこれ二十年以上の付き合いになる。当然、工房内でペーター以上に彼の画風に精通している者はなく今作もイメージの共有は完璧のはずだった・・・。

ヴァンデル:　そうだ。愚かな人間の業がついに神の逆鱗に触れ、剥き出しになった天から世界の終末を表す彗星が投下される。暗雲は立ち昇る邪気の象徴だ。
——それから思い出すのは『牛群の帰還』でもいい——。

ペーター:　どうしてそこまで闇を描こうとなさるのですか？
前景の農民たちは我々トリベルク市民を表していると仰言いました。

ヴァンデル:　(一層瞳の奥が輝いて)　ああ言ったさ。キーファが描いている。
奴は六年前の反乱を未だに覚えていて不安を払拭するためにこの主題でもって歴史は繰り返されることを俺たちに誇示したいと考えている。それでぬけぬけとこの戦争で曾祖父を亡くしている俺に絵を依頼してきやがった。

ペーター:　お気持ちは分かります。しかし——。

ヴァンデル:　聞け！　この騎馬隊は当時からルター派だった。「嘘つき博士」はこいつらの支持と金の援助を得たいがために農民を見捨てた。・・・とすればだ、もし領主どもの改宗がもっと早く、そこにファブリという最悪の暴君、私利私欲のために公然と人々を魔女に仕立て上げる最悪の賞金稼ぎが示されていたとしたら、この軍勢はどこへ向かったか？　俺はそれを描きたいんだ！
　——善悪なんてものはタイミングのものだ。その時代、その時機、その思想段階(萌芽期)でなければ秤にかけることが叶わず、時を逃せば庶民の生活にまで深く根付いてその後どれだけ残虐かつ傍若無人に扱われようとも誰もそれを疑わなくなる。そして世間に受け入れられたものは悉く善だ。ファブリのような外道はこういった空気を実に目ざとく嗅ぎ分ける——。

　そして百年の時を越えて祖先と共に立ち上がり、彼らの名誉回復と俺たちの悲願である暴君の支配からの解放を今度こそ勝ち取らなければならない！

画面左上の骸骨兵団を差しながら燃える目でペーターを睨み付ける。途端に煉獄の赤黒い炎が彼の拳圧で揺らめくのを感じた。見ると敗残者の血肉を食らって咆哮する大地やその脂を吸ってグリース状になった不気味な河やむせ返る死臭に呼吸困難をきたし、喘ぐように黒ずんだ頭を天へとのけ反らせる山々までもが彼に呼応してまるで彼に神のごとき力と軍隊が備わったような錯覚を催させる。それは「地獄と怪物の画家」と呼ばれたヒエロニムス・ボスを彷彿とさせるもので破壊された家屋や立ち昇る白煙、藁束のように燃える遠くの村があまりにちっぽけな犠牲に思われた。

・・・彼は狂気に取りつかれている。ペーターの背筋に恐怖が走る。

実際ヴァンデルがこの絵に込めた思いはそれほどに強烈でほとんど宿命に近いものを感じていた。
時代は三十年戦争の第一期ボヘミア・プファルツ戦争の終盤、ボヘミアにおける新教徒弾圧への反乱に端を発した宗教改革をめぐる戦争はバイエルンの名将ティリー伯ヨハン・セルクラエスの活躍により旧教の神聖ローマ皇帝フェルディナント二世がプファルツ選帝侯フリードリヒ五世率いる新教徒連盟軍を終始圧倒し、着々とその本拠地ハイデルベルクへの駒を進めていた。
――土地への恩義を忘れ、その崇高な思想の内に神を見たという傲慢な二人の人間が二つの十字架で以て剣戟し、焦土と化した故郷に輝かしい人類の在り方を夢想したのである――。
それは折りしも彼の曽祖父がかつて体験した農民戦争の図に酷似しており、その時も福音主義の指導者ルターに励まされた領主軍の進軍は酸鼻を極め、トマス・ミュンツァーに共感した十万の貧農はもちろんの事、反乱軍に参加した旧教徒やその町村も徹底的に弾圧され、首謀者は処刑された。

「このまま皇帝軍が勝ち続ければ母なる森は再び敵に蹂躙されるだろう。そこには勝者の享楽があるばかりである。勇敢な

曽祖父は三叉を携えてこれと戦った、その子孫は絵筆でこれと戦うのだ」

　彼はこの壁画に切実なる祈りを込めて当時イタリアの天文学者ガリレオ・ガリレイが見解を発表したことでたいへん話題になっていた彗星に着想を得てこれを天に配し、同じように未来を現す画面右側に向かって三者を配置したのである。

ペーター:　(喘ぐように声を振り絞り)　我々の意図がバレればただでは済みませんよ。

ヴァンデル:　構うものか、取り様は人それぞれだ。奴と同じ視界に立つつもりはない。(彼の肩に熱い手を乗せ)　ペーター、お前とは二十年来の同志だ。もはやお前なしに俺の絵は完成しない。特に空の描写は作品の肝なんだ、よろしく頼む。俺たちであいつに一泡吹かせてやろう！

ペーター:　・・・やってみます。

　彼の瞳の奥にかつての面影を見て何も言えなくなってしまうペーター。それはかつて彼の生きがいであったビア・ホールで見た風景。地方のよそ者は誇り高いバイエルン人から方言の違いをネタに洗礼を受けて一様に暗い酒を飲んでいたが、その中でただ一人そんなことは全く意に介しない、眼中にないといった様子で皿のグリーンピースやニンジンをすり潰して顔料の練り具合や陰影の付け方を研究し、彼の工房の流派であるアルブレヒト・デューラーの画風を見事に描き出す男がいた。彼はその男に革新的なものを感じて一目で陶酔してしまい、彼がいよいよ故郷へ帰って工房を始めると打ち明けられた時にはあっさり故郷と職を捨ててトリベルクへやってきたのだった。

ヴァンデル:　・・・問題はあいつだ。偶像崇拝にうるさい新教徒のクセに目を離すとすぐに楽園へ出かけやがる。おい、キーファ！　おい聞こえないのか？

(そして矛先はニコへ)　ニコ、お友達を迎えに行ってやれ！
俺には入口がさっぱり分からない。行って俺が呼んでると伝えてくれ。

そう言うと壁面を振り返り、今一度画面を浮き上がらせる。

ニコ:　(アズライトを磨る手を止めて友の肩を叩き)　ねぇ君、「黄金の時間帯」が終わってしまうぜ。僕がせっかく練った漆喰が乾いてしまうよ。

キーファ:　ああニコ・・・。

ニコ:　君は集中しすぎるといつも周りが見えなくなるんだ。
君の絵が進んでないってマイスターがご立腹だぞ。

キーファ:　(担当する右側の画面を見て)　ああ、またあの子の顔は見えなかった・・・。
身を乗り出して何度も見ようとしたんだ、それでも見えなかった。
エリーゼの背中もだんだん小さくなって滝のように降る雨の向こうへ消えてしまった・・・。(狂おしく画面へ手を伸ばす)

そこにマテウスが冷やかしを入れる。

マテウス:　マイスター、マルスが寝取られ男のベッドから戻って来ましたよ。

ヴァンデル:　(嘲笑気味に振り返り)　道理で甘ったるい絵を描くと思った。
おい、農民一人描くのにいつまでかかっているんだ！　ミケランジェロを描くのは諦めろ。どうせ現代に大天使ミシェルのような顔をして戦場に立つ奴なんかいないんだ。
(騎馬隊に従う火砲を指さして)　こいつのせいでな。百年前から俺たちの敵はこの鈍重で無様な鉄筒に変わった。俺の爺さんもこいつにやられたんだ。こいつを前にしたら戦術も騎士道精神も無い、ドカンと一発火を噴けばそれで馬も人も木っ端みじんだ。——悪魔め！

人殺しの道具はいつも地中から掘り出される。

キーファ:　(いまだ夢見心地で)　彼は確信していたんです、道の先に光はあると。
同胞は必ず同じ方向を向くと信じていたんです。

ヴァンデル:　その通りだ。俺たちの祖先はこの戦争の後、ルターを「嘘つき博士」と呼んで旧教に出戻った。愛する家族を殺され、神の恵みに物申さぬささやかな日常さえ破壊し尽され、それでも口を閉ざして生き抜くことを選択した。
そしてその結果がこの様だ。(嘲笑)
　偉大な先人たちの勇気ある決断が、人生を賭した戦いが、胸を引き裂かれんばかりの悲しみが、嘆きが、屈辱が、怒りが、無念が新教のお前に分かるか？　そうして後世に託されたかけがえのない愛が一人の暴君によって無残に踏みにじられた俺たちの怒りがお前に分かるか？

　怒れ！　憎め！　美しいものを描くのと同じ筆に怨念を込めろ！
今度はそれをファブリと皇帝軍に向けてやるんだ。祖先たちの思いを叫べ！

　ペーターとニコの表情は青ざめ、マテウスとの対比はますます濃くなる。そこへキーファが仲裁の言葉を投げかける。

キーファ:　・・・憎しみで光を見つけることは出来ません。
暗い森で怪物を倒す使命を与えるだけです。

ヴァンデル:　だから倒すんだ、過去を断ち切ることなしに未来は無い！

キーファ:　ですがそうしたら今度は親方が森の番をすることになります。

ヴァンデル:　なんだと！

キーファ:　(独白気味に)　・・・そうしたら誰かが親方を倒さなくちゃいけない。

ヴァンデル:　(今にも足場から飛び降りそうな勢いで)　キサマ――！

マテウス:　よせよキーファ。これは戦争画なんだぜ。勝者が森を統治する――結構なことじゃないか。これはそのための戦いだ。(画面を指す)

そうですよね、マイスター！

これに満足したヴァンデルは鼻を鳴らして腕組みをする。

キーファ:　マテウス・・・、それでは駄目なんだ。この絵は親方の誇りだから。
未来を切り拓くためにはあの彗星は流れ星でなければ――。

ペーター&ニコ:　(イメージを共有してうなずき)　キーファ。

ヴァンデル:　(はっとして赤面するが湧き上がる創造力をもはや留める事も能わず)
・・・お前に何が分かる？　新教の夢想家が、こちらが理解のあるところを見せれば付け上がりやがって。俺がいつ誇りに反する仕事をした？
えぇ、言ってみろ！

彼はかねてより抒情的な表現力においてキーファに負い目に似たものを感じていた。その描写にはこの度スペインから独立を果たしたオランダ画家のごとき前衛的で自由な気風があった。一言でいえば華があった。彼の加筆なしにはヴァンデルの作品は精密で内向的な建築士の作図の延長に過ぎず、ペーターが方眼の目を広げ、キーファが物語を付けてやっと人目を驚かせる芸術作品に仕上がるというのが現状だった。
それは本作に関しても同様で、一枚の戦争画として見るならば現在彼が描きあぐねている画面手前の「振り返る青年」の描画こそがこの壁画に向けられる視線の始まりと終わりを占めると言って過言はなく、かつてレオナルド・ダ・ヴィンチの天使が行ったように師匠の作品を食ってしまいかねないものだったのである。

彼はここ数年のキーファの成長にヴェロッキオの運命を意識しないではいられず、それでも彼の親方として近い将来訪れる遍歴修業に出るべき時期に備えて、また彼の袂を分かって独立する日のことまで視野に入れてここらで自身の壁を打ち破って

おく必要性に駆られていた。そこで彼は全身全霊を込めてそれに挑み、たった今他でもない最高の弟子によって否定されてしまったのだった。

・・・俺の絵が気に入らないなら辞めてしまえ。

捨て台詞のように空中に向かって吐き捨てる。
はっとして顔を上げるペーターとニコ。

キーファ:　(彼の真下に来て乞うような眼で)　親方！

ヴァンデル:　そうだ、俺がマイスターだ。俺の構図に異議のある奴と仕事は出来ない。
——マテウス、キーファに代わってお前が入れ！

　この号令に待ってましたとばかりに応えたマテウスは勝ち誇った顔で立ち上がった。彼はキーファより二つ年下で徒弟期間六年目、マイスターの画風を忠実に受け継ぐ期待の新人だった。

　キーファは肩をすくめて親方を見上げ、なおも考え直すよう無言で訴えた。しかしヴァンデルは彼以上に絶望した表情で首を振り、彼に背を向けつつさらに決定的な一言を告げる。

・・・お前の絵には狂気が無いんだ——鬼気迫る死のイメージがな。

ペーター:　マイスター！

　キーファの顔が歪む。ヴァンデルも苦悶の表情を浮かべつつ形ばかりの作業を再開し、二度と振り返らなかった。

　マテウスが無遠慮にキーファの許へ歩み寄る。

マテウス:　パレットを。

ペーター:　マテウス、お前も！　デッサンに戻れ。

マテウス:　なぜです？　マイスターが入れと仰言ったんですよ。
ようやく僕にもチャンスが回ってきたんです。

ペーター:　いいから下がってろ。
――マイスター、頭を冷やして下さい。言いたくはありませんが今のあなたを突き動かしているのは狂気です。キーファの描画無しにそれを抑え込む術はありませんよ。

ヴァンデル:　(やけになって)　お前も俺の絵に不満があるなら辞めていいぞ。
俺とマテウスで描く。

マテウス:　仰せのままに。　――さあ、パレットを。

ペーター:　マイスター！

キーファ:　いいんです、ペーターさんがいなくなったら親方が困ります。

ペーター:　キーファ、しかし・・・。

キーファは大丈夫と頷いて見せ、それからマテウスとしばし睨み合う。彼の自信たっぷりの表情にむしろ哀れみを催し、力ないため息をついてパレットと筆を渡す。ただしそれを敗者の諦めと受取ったマテウスは彼の心情を察する様子もなくそそくさと足場へ上がってしまう。

彼は名残惜しそうに画面を見上げ、改めて青年の顔を想像してみる。・・・親方はどんな表情を期待したのだろう？
自然と手が動く。ペーターとニコは何も言わず各々の作業に戻り、背中越しに彼を見守っていた。これはヴァンデルも同様だ

った。
　しかしそれはマテウスの無遠慮によって脆くも打ち破られる。彼はキーファより先に画面を決めた風を装っていたが、実はライバルの絵がいつまでも自分の画面に鎮座しているのに耐えられなくなってとりあえずボロで例の「振り返る青年」の画だけでも拭き取ってしまうことにしたのだった。
　はっと我に返って肩を落とすキーファ。自分の荷物を持って入口へ向かう。ニコが慰めを込めた声を掛けてくれたが、微笑みだけ返して親友の務めを労ってやった。そしてもう一度画面と親方を見遣る、まるでこれで見納めであるかのように・・・。

　とそこへ上手よりトリベルク城主ファブリと若干の護衛、そして下僕が入ってくる。服装は当時のヨーロッパ世界を取り巻くメランコリーの流行に従って黒を着用、そこにやかましい金刺繍と切り込み装飾が入り、首周りにはハリセン(張り扇)を丸めたような襞襟が付いている。半ズボンとタイツは白。さらに腹部と股間部を強調するべく綿などの詰め物がしてあるためバターナッツのような体形に見える。
　警護の者たちは無地で同じ装い、それを赤でまとめ、腰にサーベルを佩いている。下僕も黒で装飾と装備なし。

領主:　入るぞ。貴様らおかしなものを描いていないだろうな。
　私への謀反の徴を見つけたら即刻異端審問にかけてやるからそのつもりでいろ。

　畏れと猜疑心と自己欺瞞に苛まれた眼で画家たちを睨め回し、鞭打ち症のようにやや顎を上げて物を言う。

　——おいキサマ、何処へ行く？　城を勝手に徘徊することは許さないと申し付けてあるはずだ。

キーファ:　(帽子を取って胸に当て)　領主様、体調が優れないので今日はこれで失礼してもよろしいでしょうか？　私の代わりはマテウスが務めます。

領主:　気分だと？　まさか私が静物のデッサンに提供した食糧に手を出したのではある

まいな？

キーファ:　滅相もない！　神様に誓ってそんなことはしません。

領主:　何だ、元気な声が出るじゃないか。・・・まあいい、行け。

キーファ:　失礼します。

腰を丸めてお付きの者たちの間をすり抜け退室する。

領主:　ヴァンデル、何があった？

ヴァンデル:　(帽子を取って)　キーファを外しました。俺とは目指す絵が違ったんで。

領主:　(声を弾ませて)　何、それは誠か！　ようやくあのプロテスタントを追い出したか。
それではもう奴がこの城に足を踏み入れる事はあるまいな？

ヴァンデル:　はい、恐らく・・・。

領主:　(不愉快な笑い声を出して)　これは愉快だ！　私はもっと早くそうすべきだと予
言しておいたがやはりそうなったか。——それで納期に支障は？

ヴァンデル:　問題ありません、マテウスは彼より筆が速いですから。

領主:　益々もって素晴らしい！
新教徒は聖書の挿絵か背景でも描いておればよろしい。

マテウス:　マイスター！　クリムソン・レーキを上塗りすればよいでしょうか、
ミシェルの透明感を抑えるには？

ペーター:　マテウス、——(厳かな視線で威嚇する)！

マテウス:　何も描かないで終われませんよ！　——如何いたしましょう？

ヴァンデル:　・・・ああ、バーント・シエナを足して手に負えないようならそうしろ。

領主:　お前の思う通りにしなさい。さっさとその忌まわしい絵を塗り替えてくれるといい。

マテウス:　恐れ入ります、領主様！

　ペーターに対しても勝ち誇った顔をするマテウス。そして
足場の上で屈んでニコに絵の具を要求する。

おいニコ！　クリムソン・レーキだよ。早くしてくれ。

ニコ:　悪いけど他の人に頼んで。
　——マイスター、水を代えてきます。

ヴァンデル:　よせ、無駄なことだ・・・。

ニコ:　(それでも親方の表情を察して)　・・・失礼します、領主様。

　一礼して駆け去る。
マテウスの叫ぶ声を残して内幕を閉じる。

第二場——トリベルク　街路上

　外舞台。作業場を追われて城を後にするキーファ。六年前の反乱で焼打ちに遭った痕跡がいまだ完全修復されておらず痛々しい。普段このような時間に街を出歩くことはなかったのでお気に入りの滝の昼の顔でも拝みながらしばらく落ち込んでいようかとの衝動に駆られたが、あまりの人通りの多さに断念し、足早に街を立ち去ることにする。
　舗装された街道には木組みの可愛らしい家々が整然と建ち並び、そのいずれの出窓を見ても季節の花々が飾られていたが異

教徒の彼の不安を和ませるには至らず、そればかりか街を知れば知るほどそれが凱旋パレードの飾りのように思われてきて彼はますます帽子を目深にかぶるのだった。

　・・・親方の言葉は以前から予想していたことだった。それはここ最近折に触れて明滅していたことだったし、ちょうど今朝も母さんに打ち明けようか思案したところだったから。
　けれどあの場に居られなくなったのは僕に狂気が無いせいなんかじゃない、あそこでエリーゼを引き留めることができなかったからだ。――エリーゼに会いたい、とにかく会って確かめたい。
ずっと一緒だって、決して離れ離れにはならないって。
エリーゼ、エリーゼ・・・。

キーファ:　エリーゼはそろそろ教会を出る頃だろうか。そして広場を通って市場に特有の陽気で小ざっぱりとしたあいさつを交わして一時の息抜きを楽しんでいるだろうか――僕自身が会って気晴らしになってあげられない今はそれだけが救いになる。可哀そうにもう二年もかごの鳥のような生活をしている。エリーゼが十四歳の誕生日を迎えた日からだ。グレートヘンさんは突然僕を毛嫌いするようになって二人で会わせないよう彼女を家の中にしまい込んだ。昔は二人で夕暮れまで野原を駆け回ったり、そり遊びをしたり、手掴みで魚を獲ったりしたものだったのに・・・。
　裏の林で迷子になってそのまま夜を明かしそうになったこともあった。
月明かりの下エリーゼが僕を励まそうと『森の音楽家』を歌ってくれて、そうしたら暗闇の中から二つ三つと松明の炎が近づいてきたんだ。見ると村中の大人たちが僕たちを探して来てくれて、「ヒルシュケーファー」なんて黒は目立たないからって真っ赤な礼服に着替えて太鼓を叩きながら行列を従えてきてくれた――あの日から「ヒルシュケーファー」は僕のヒーローになったんだ――！
その後、二度とそんなことがないよう二人で村の地図を書いたっけ。

　・・・そう言えばニコとの間を取り持ってくれたのもエリーゼだった。
僕が旧教の街へ来るのを嫌がって駄々をこねた時、エリーゼが手を引いて一緒にトリベルクまで来てくれた。それでこっちに友達を作ればいいんだって道々でばったり会うことが多かったニコに声を掛けてくれた。ニコも僕たちを見るといつもユリアさんのスカートの裾に半身を隠してしまう子だったから。

　ああエリーゼ、君ほど僕の人生を豊かにしてくれた人はいない。君ほど僕の心を豊かにしてくれた人はいない。だって僕に恋を教えてくれた人だから。
それなのに今じゃ君だけが往来から閉め出されて独り苦しんでいる！
なんて切ないんだ。僕が一人前の画家になって君を連れ出してやれたらなあ。

そこへキーファを追ってきたニコが上手より登場する。

ニコ:　キーファ！

キーファ:　ニコ。ちょうど君のことを思い出していたところさ。
それにしても僕たちはなんて無力なんだろうね。

ニコ:　なんのことだい？

キーファ:　他の仕事ならそれをただ造り上げさえすれば一人前として認められるけど芸術家は作品を完成してからもう一度、半人前の位置に連れ戻されて審査を受けなければならない。

ニコ:　そりゃそうだよ。機織りは糸を紡いで織れば売り物になるけど、僕たち画家はそこに描いた柄を売るのだから。しかも布をダメにしてね。

キーファ:　エリーゼはそれ以上仕立てなくたってタペストリーとして十分にお客を魅了するはずなんだけどなぁ。彼女を慕う子たちもたくさんいるし。なのに慕われるが故に却って彼女の扱いに神経質になって、丸めて家に押し込められるという憂き目に遭っている。だったら最初から自然のままの彼女を受容れればいいと思うんだ。

ニコ:　ああ僕もそう思うよ。あの作品に君の描画が必要だって事はみんな分かってる。
けどグレートヘンさんにしても親方にしても思い入れが強すぎるんだ。
今は大人しく身を引いて成り行きを見守るのが利口さ。

キーファ:　・・・どうせなら従弟の君に譲ってあげられればよかったんだけど。

ニコ:　からかうのはよしてくれ。僕に君の代わりが務まるもんか——もちろんマテウス

にもね――。悔しいけど今の僕はマテウスにも及ばない。・・・だから僕も成り行きを見守ってるのかな。(力なく笑う)

キーファ:　君は気付いていないんだよ。
　　僕だって君の絵に魅かれて親友でいるんだってことに。

ニコ:　(心が喜びでざわつき、動揺する)　買い被りだよ。それに譲るなんて言うなよ。
明日もちゃんと来るんだろう？

キーファ:　・・・。もしかしたら僕はこうなるのを待っていたのかもしれない。

ニコ:　まさか君、遍歴に出るつもり？　今は戦争中で黒い森の外は日常的にどんぱちやっているというのに。第一、シュヴァイツァーさんが許してくれないだろう。

キーファ:　さあね。でもそういう時期に来ていることは君にも分かるだろう。僕は親方の下では自分の絵が描けない。それにエリーゼは今泣いているんだ、待ってるなんてできない。

ニコ:　それじゃ告白しろよ。一人前になってからなんて格好つけてないでさ。
エリーゼだっていくら「ユリのような」ともて囃されたって、頭でっかちになってうつむいているばかりじゃやっぱり不幸だよ。噂じゃグータッハでコルセットを着けてるのはグレートヘンさんとエリーゼだけっていうじゃないか。
早く助けてやれよ、王子様。

キーファ:　うん。ありがとう、ニコ。

ニコ:　大丈夫、きっとうまくいくさ。それで一つがうまく行ったら他のこともみんなうまく行くようになるって。・・・一人で戦えるね？

キーファ:　うん。この話はみんなには内緒にしておいてくれる？
　　親方にはちゃんと決まってから話したいから。

ニコ:　わかった。その代わり明日もちゃんと作業場へ来るんだよ。マテウスの助手は僕がするから。それじゃエリーゼによろしく。よい午後を！

ニコの頼りなくも頼もしい小さな背中を見送って片道約三時間の通勤路を引き返す。ストラスブールからコンスタンスを結ぶ街道上にあってなかなかの往来があり、ブドウ酒を積んだ荷馬車や乗合馬車や郵便配達人の馬が行き交うのに出会う。
また途中の谷には牧草地やブドウ作りに適する地があってグータッハの支配者の居城があるホルンベルク村から放牧に来ている牛の群れがみられた。

ただし舞台上では内幕を開くと直ちに村へ到着し、緑豊かな風景が広がる。街道に面したところは舗装されていてトリベルクと似た町並みになっているが一歩踏み入るとやはり隠れ里あるいは野原に設けられた野営地の印象が顕著で、旧教(ハプスブルク家)が所有するシュヴァルツヴァルトの中にあって彼らが緩やかに受け入れられていった歴史を感じられる。それでも勤勉な彼らは立ち止まることなく斜面にブドウ畑を作り、夏には黄金の穂を揺らしてきた。小川にかかる水車は絶えず回り、チーズ蔵では年数の違う発酵物がシンプルに混ざり合って一つの有機的な匂いを発している。黒っぽい、茅葺屋根の重厚な一部屋造りの家屋に巡らされた垣根もきれいに刈り込まれているし、十分なゆとりを持って設けられた前庭でも花壇と家庭菜園が玉のしずくを弾いて活き活きと枝葉を伸ばしている。
村人たちはみな陽気で社交的、働き者で親切、そして田舎者らしく旧教徒への偏見や差別意識を全く持っていなかった。
キーファは十七年前に生を受けて以来、こういった環境で暮らしてきた。森の外の住人に言わせれば妖精のように駆け回ってきた。

・・・かすかに赤みが差したマリーゴールド色の日差しに迎えられて村へ帰り付いたキーファは教会の側の泉から水を飲み、そしてエリーゼと日曜以来の再会を果たす。彼女は家族ぐるみで親交の深いマレーおばさんの所へ使いに出た帰りで、手には修繕してもらった鍋つかみ(ミトン)が抱かれていた。口を拭う手がスローになり、思わず見惚れる。と彼女の方が気付いて近づいてきたので口をもう一度乱暴に拭って歩み寄る。

エリーゼ:　あら、キーファ。お帰りなさい、今日は早いのね。

キーファ:　やあエリーゼ。うん、どうも筆が乗らなくてね。領主様に言って今日は早く上がらせてもらうことにしたんだ。
　(ここから取って付けたようにまくし立てて)　ニコには恋煩いのせいだって言われたけどまったくその通りだよね。僕たちの仕事には渇望が必要なのに恋ときたらまったく悲しみにつけ、喜びにつけ、苦悶につけ、とにかく胸の内を水浸しにしてしまうんだ。

エリーゼ:　・・・。

キーファ:　ほら、今だってそうさ。街道を一人きりで三時間も歩いてきたのに君に逢うともうすっかり渇望が癒されて幸せな気持ちでいっぱいになってしまう。
　君はお使い？　この時間には外へ出してもらえるんだね。

エリーゼ:　ええ、マレーおばさんのところへ。
・・・また親方に酷いことを言われたの？

キーファ:　(動揺を隠すように強がって)　言っておくけど僕は逃げてないからね。
・・・外されたんだ、マルスを描くなって。

エリーゼ:　「マルス」って？

キーファ:　ローマの軍神さ。騎士たちが剣と槍で勇敢に戦っていた時代の。

エリーゼ:　領主様が依頼したのは戦勝祈願の絵でしょ。なぜいけないの？

キーファ:　僕の担当は農民兵だったんだ。つまり矢を射られる側。今の僕と同じだね。

エリーゼ:　農民だって戦うとなれば勇敢になるわ。

キーファ:　それは反逆になるんだって。けど矢を射られて動かなかったら僕はナルキッソスになって涙で作った泉に顔を映すしかない。(乾いた笑い)

エリーゼ:　・・・。

それであなたの代わりは誰が務めることになったの？　マテウス？

キーファ:　うん、そう。残念だけど彼は親方のお気に入りだから・・・。

エリーゼ:　私マテウスのことは好きになれないわ。そう何度も会ったわけではないけど何かに付けて野心的で、自分だけが何か特別な人間でもあるかのような態度をするんですもの。きっと夫婦の間でも勝ち負けにこだわる人だと思うわ。そう思わない？

キーファ:　確かに。ニコなんて一つ年が上で工房にも先に入ったのにまるで小間使いのように扱われているよ。でも技術は確かだよ。親方の模写はもう完璧にできるんじゃないかな。ペーターさんと三人で描けばきっと親方が一人で描いたように仕上がるはずさ。

エリーゼ:　(不服そうな沈黙を挟んで)　負けを認めるの？　破門されたわけではないんでしょう。だったらもう一度親方に掛け合ってみるべきよ。親方はきっとあなたの絵を必要としているはずよ。

キーファ:　どうかな・・・。僕には分かるんだ、今度の親方は気迫が違うって。
少なくとも独りになっても描き上げる覚悟だよ。

エリーゼ:　でもそれが良い作品になるとは限らないわ。少なくともこれまでの作品が評価されてきたのはあなたやペーターさんの助けがあったからでしょ。

キーファ:　・・・それは僕も言った。この作品には親方の誇りが込められているって。
そうしたら怒らせちゃった。

エリーゼ:　・・・それでシュヴァイツァーさんには何て言うつもり？

キーファ:　どうしよう、考えてないや。

エリーゼ:　ちょっと、しっかりしてよね。
おじさんはあなたに木彫り職人になってほしいって思っているんでしょ。

キーファ:　なんでもいいから早く一人前になって欲しいんだよ。
もしかしたら旧教の街へ行くことも内心嫌なのかもしれない。

ねぇ・・・、もし僕が――

エリーゼ:　(そっぽ向いて)　嫌よ。私は認めないわ。
キーファは絵描きじゃなきゃ駄目なの。

キーファ:　木彫りをやったって絵は描けるさ。
(木炭筆と木板を掲げて)　ほら、僕にはこれがある。

エリーゼ:　(軽蔑の視線を向け)　それで何を描くつもり？　牛や小麦畑を描いたって何にもならないんですからね。

キーファ:　もちろん君を。・・・ねえ、そこへ立ってよ。

エリーゼ:　(頬を赤らめて)　駄目よ、遅くなるとママに叱られるから。
――あ、「お母様」だった――。

キーファ:　少しの時間だけだからさ。ほら、そこのフサスグリの茂みの前がいい。

困った顔で頭巾を撫でつけながら自分の立ち位置を定めるエリーゼ。視線を動かすたびにくるくると変わる表情、忙しなく這い回る手、それに小刻みな足運びなどあらゆるしぐさが彼女のはしゃぎようを伝えていた。その姿がかわいらしくて愛しくて、叶うならすべてのコマ(瞬間)を記録しておきたいと思った。
ニコの言葉が頭をよぎる。

エリーゼ: ここでいい？

キーファ:　もう少し右。

エリーゼ:　えっ、こっち？

足元の不具合を確認し、後ろ手を組んで横歩きするエリーゼ。二度の指示には素直に従い、三度目で首をかしげる。そして茂

みが途切れ、舞台の袖が近づいているのを見て彼の企みに気付いた所で悪戯は成功に終わる。ありきたりなやり取りだがお互いの呼吸を知り尽くした二人が気持ちを確かめ合うにはそれで十分だった。

　イヴの血を引く女性たちが愛に目覚め、世俗化を喘ぐように求めながら楽園追放の忌まわしい記憶との間で揺れ動く葛藤の時代、それはキーファにとっても地面を擦るローブの裾ほどには自然に受け入れることはできなかった。

エリーゼ:　ねぇ、これでいい？

　頭巾からはみ出した毛を仕舞いながら不安そうな視線を向ける。このときキーファは二度目の恋に落ちた。

キーファ:　そのまま・・・。

　それは画家とモデルの間で交わされる最も一般的な会話だったが、想い合う二人にとって最上の愛の言葉となった。
二人はその祈りにも似た言葉の余韻を味わいながらそれぞれの仕事を果たした。後ろのニレの木の枝では好一対のツグミが滑らかに饒舌に愛を語り合っている。

　エリーゼ・バーンスタイン。長い保育期を経て外界に触れ、これから何百何千の人たちと出会うであろう人生の萌芽期にほとんど直感的に将来をイメージし、崇敬の念を抱いた初めての女性。母親には似ず絶世の美人とは言えないが愛情深さと芯の強さが同居する利発そうな顔立ち。澄み切ったグリーンの瞳と軽く開かれたM字型の唇、そして前頭葉の発達した女性らしい豊かな額が特徴的で、エノクが天界で見た輝かしい人々のように輝いている。身長も高くはないがウエストラインが高く作られた衣服を着ているせいか頭身のバランスが申し分なく見える。

一筆ごとに戸惑い、一筆ごとに確かめる・・・。

キーファ:　瞳の色が変わったね。

エリーゼ:　(頬が赤らみ、瞳孔が開く。ずるい微笑がこぼれる)　髪の色が変わったのよ。
あなたのはまだ明るいわね。

目を伏せる彼女に畳み掛けるように囁く。

キーファ:　僕はまだ子どもだから・・・。
君はすっかりお嬢さんだね。見違えるように綺麗になった。

エリーゼ:　今頃気付いたの？　私はいつでもあなたのお姉さんをやってきたわ。
あなたはいつも絵の事で頭がいっぱいだから。　・・・ねぇ？

キーファ:　何？

エリーゼ:　もう遍歴に行く土地は決めたの？

キーファ:　(一瞬息が詰まる)　知ってたんだ。
まだだよ。今は戦争中だし・・・。

エリーゼ:　ダメじゃない。遍歴に行かないと一人前になれないのよ。

キーファ:　エリーゼは僕が村を出て行ってもいいの？　何年も帰って来られないんだよ。
(ためらいがちに)　首府――シュトゥットガルト――へ行けばライナルトに会
えるかもしれないけど・・・。

ライナルトとは六年前に家出同然にバーンスタイン家を飛び
出したエリーゼの二番目の兄の事である。彼はまたキーファと
ニコの義兄弟でもある。

エリーゼ:　画家になるのはあなたの夢でしょ。私のことは関係ないわ。
ライナルトだって・・・。

キーファ:　あるさ！　僕はこの村を描きたいんだよ。エリーゼもライナルトも、それにミリオット(マクシミリアン)もいるこの村を。叶うなら君と一緒にすぐにでも描き始めたい。・・・でも遍歴に出ている間に君や村のみんなが変わってしまったらどうしようって考えたら怖くて仕方がないよ。

エリーゼ:　(ややむきになって)　それじゃ巨匠が偶然この村に滞在してくれるのを待ってるつもり？　そんなの諦めと同じことよ。幸運は自分から掴みに行かなきゃ。

キーファ:　諦めてなんかないよ。何も諦められないからこうなんだ、きっと・・・。

エリーゼ:　そうね。私だって諦めてない。ママを悲しませたくないからおしとやかにしているけど私もやっぱり何も諦められない・・・。
　みんな笑っているでしょう？　田舎娘が気取ってコルセットなんか着けたりして。

キーファ:　そんなことないよ。ニコも君はユリのようになったって言ってたよ。

エリーゼ:　嘘よ。だって私ニコにも会っていないもの。きっとみんな胸の内で気取っていると思っているに違いないわ。　・・・昔は違ったのにね。

　自分たちの無力に打ちのめされる二人。お互いが想い合いながらまるでピラマスとシスビーの悲劇のようにのぞき穴の空いた石垣に隔てられて、彼らに好意的でない時の流れに身を委ねなければならないことが泣きたいくらい悔しかった。

　とそこへエリーゼの母グレートヘンが姿を現す。
白の長そで胴衣の上に胸元が四角く空いたマスタード色の外衣を着け、白いエプロンを着けた装い。腰帯に真鍮製の十字架をぶら下げている他に飾り気はない。栗毛の髪は三つ編みにして青い頭巾にきっちり納められている。
　顔の造りは悪くなかったが、ライナルトの事があってからと

いうもの、むしり取られた魂をもはや一グラムも失くすまいと肉屋の秤を睨みつけるように時の砂が不正なく落ちて行く様を眺めて暮らしたので彼女の深いグリーンの瞳は落ちくぼんだ眼窩にはまってほとんど動かず、唇は色褪せ、そのせいで口角には常に影が差して見えるなどすっかり参ってしまった。
今や彼女を支えているのは自分は上流階級の人間だという誇りと欺瞞にも似た厳格さだけだった。

グレートヘン:　・・・やっぱりそういうことだったのね。

　悲観論者に特有の推理を披露する彼女の表情は彼ら以上に絶望している。

エリーゼ:　・・・お母様。これは違うの！　キーファとはたった今偶然に会ったのよ。本当よ、私お母様に嘘は言わないわ。

キーファ:　エリーゼの言うのは本当です。今日はたまたま仕事が早く終わって——

グレートヘン:　(彼には目もくれず、瞬きもせずに娘をじっと見据え)　およしなさい。言い訳なんてものはそこの似顔描きのような人がするものです。私に許しを乞う時にはふさわしくないわ。

エリーゼ:　キーファは似顔描きじゃありません。どうして彼と会ってはいけないのですか？　十四になるまでは何もおっしゃらなかったわ。

グレートヘン:　それはあなたがもう子供ではなくなったからです。バーンスタイン家の長女として立派な家柄の殿方に見初めて頂かなければならない時に、旧教徒に仕事を恵んでもらっているような男と親交があると知れたら先方は気分を害されるでしょ。良家の娘は結婚後の人間関係の事まで考えて行動しなければなりませんよ。
　さあ帰りますよ、トリッシュがその鍋つかみを待っています。——こんなことなら始めからあの子に行かせるのだった——。

村人一:　(通りの向こう側で)　おい聞いたか？　何て言い様だ！

村人二:　ああ、それじゃエリーゼが良家に嫁いだら俺たちはバッタみたいに草むらと同化してぴょんぴょん飛び跳ねなきゃいけないってのか。この村はバッタが耕してネズミがチーズを作るのか。

村人三:　ひでえ話だ。おい、グレートヘン！　俺たちをバッタにするなんてひどいぞ。

村人一:　いやいやそこじゃねえ。キーファに酷いことを言ったんだ。
あの子だって新教の工房があればそこへ奉公に出てるだろうに。

村人二:　そうだそうだ、お前は美人だが口が悪いぞ。

グレートヘン:　ごきげんよう、皆さま。どのような経緯でそのような噂が流れているのかは存じませんが、これは我が家の問題です。お節介はお控え願います。
さあ行きますよ。(娘の手を引く)

村人三:　おやおや、俺たちにまで気取ってら。あそこの家じゃ雑巾にだってアイロンが掛けられるんだからなぁ。(三人して嘲笑する)

エリーゼ:　痛い！　離してママ、自分で歩くわ。ママ！　(キーファを振り返る)

いざとなるとやはり臆病になって何も言えなくなるキーファ。
呆れ顔の村人たちと肩を並べる様子は実にみじめだ。
――とそこへ突然、黒いフードつきのローブをまとった男の子が駆けてきてエリーゼに勢いよく抱き付く。

男の子:　ママ～！

驚いて体をこわばらせるエリーゼとそんな彼女に手を振りほどかれたと思って彼女を叱るグレートヘン。

グレートヘン:　エリーゼ！　・・・何をしているの？

エリーゼ:　この子が・・・。

グレートヘン:　何も居やしないわよ。早く来なさい。
(と振り返り、前方を見遣って)　あらま、なんてことでしょう！

見るとやや黄味がかった白バラ色の絹の召し物を付けた高貴なカップルが馬を下りてこちらへやってくる。彼らはハイデルベルクの貴族子息カール・ホルバインと新妻のルクレツィア夫人で六月に式を挙げたばかり、ハネムーンの目的地であるティティゼーへ指して旅行中だった。護衛の者たちは黄緑がかった茶色、下僕のオリバーは黄土色と青を着用し、侍女のエマはうぐいす色を着用してルクレツィア夫人の三オーヌ(一オーヌは一．一八八メートル)になる裾を持っている。

ホルバイン:　もし御夫人、この村の村長にお会いしたいのだが案内を頼めますか？
御夫人？

動きにくい詰め物から解放されてゆったりとしたオランダモードに身を包んだ彼の挙動は身に着けた優美さやスマートさが見た目にも表れるようになり、ことさら高貴で洗練された印象を与える。折り返しのあるブーツから覗く引き締まったふくらはぎの曲線美もたいへん美しい。左手薬指には骸骨を彫刻した銀の結婚指輪が鈍く光る。

グレートヘン:　(緊張から声がうわずって)　はい？　私ですか。村長なら畑にいらっしゃると思います。すぐにご案内いたします。さあこちらへ。

ホルバイン:　ではルクレツィア、君は少しここで待つように。すぐに宿を手配するからね。

ルクレツィア:　はい、あなた。(ビズをする——互いの頬を合わせる挨拶)

ホルバイン:　(護衛隊に)　お前たちもここで待て。オリバーは私と来い。

オリバー:　はい、ご主人様！

　グレートヘンはことさら澄まして村人たちの前を通り過ぎる。残された村人たちは彼女の背中に舌打ちをしたりぼそぼそと恨み言を言ったりするが間もなく全員がルクレツィア夫人に目を奪われる。

ルクレツィア:　(観衆に微笑みかけて)　ごきげんよう。

　彼女もコルセットやファーチンゲール(釣鐘状の枠を縫い込んだ下着)から解放されたことで貴婦人らしい、アンニュイで色っぽいシルエットが際立っている。

村人たち:　おお、女神様が口を利かれたぞ。なんて美しいお声だ・・・。

キーファ&エリーゼ:　御機嫌よう、ルクレツィア夫人。

ただしエリーゼだけ片膝を引いて上流のあいさつをする。
男の子も見まねで頭を下げる。

ルクレツィア:　あら、あなたはちゃんとご挨拶ができるのね。お名前は？

エリーゼ:　エリーゼです。養蜂家の娘です。
失礼ですがそのお召し物は結婚式でお召しになった物でしょうか？
左手には結婚指輪もなさっています。

ルクレツィア:　(指輪を見せつつ恍惚と倦怠感を示して)　ええそうよ。リングの裏には永遠の愛を誓う言葉が彫ってあるわ。先月の頭に挙式をしたの。それから

バーデンバーデンで二十日間滞在して本日はホルンベルクまで行く予定でしたの。ご存じ？

村人たち:　(傍白)　おお、エリーゼが女神様と話をしとる。あの子は巫女か何かかね？
しかもちゃんと俺たちにもわかる言葉に翻訳して。あの子は巫女か何かかね？

手をたたいて喜ぶ男の子。その様子をキーファが不思議そうに
見つめている。

エリーゼ:　はい。ホルンベルク(ネッカーツィンメルン)はゲミンゲン伯爵がお住まいになっている町です。伯爵はグータッハの支配者でもあられます。

ルクレツィア:　そうそう、そのゲミンゲン伯爵のお世話になる予定でしたの。
けれどこの辺りは新教の町が少なくて気が遠くなるほど一日の旅程が長いでしょう？　それで私疲れてしまって・・・。

村人一:　(傍白)　おお、女神様がお疲れだそうだ。椅子を持ってこい。
あとはでっかい羽根扇だ。

村人二:　いいや、俺たちの家にあるようなぼろい椅子をお出ししたら却って失礼だ。
それにあの長い裾を見ろ、俺たちの椅子にどうして座るっていうんだ？

村人三:　ほんとだ、何だあれは。裾を持つだけの召使までいるぞ。

村人一:　背もたれに裾をひっかけてお座りになるんじゃないか？

村人二:　バカ言うな、そうしたら足が丸見えになるじゃないか。うちの家内が言ってたが余所様に足を見られるのは裸を見られるのと同じくらいはしたないことなんだぜ。だから足を怪我しても滅多に医者にかからないし、いいとこのご夫人なんかは紐で足のサイズを測って下男に靴を買いに遣らすらしい。

村人一:　分かった、あの召使が足元にしゃがんで隠すんだ！

村人三:　・・・背もたれなしのでいいんじゃないか？

見つめ合うキーファと男の子。

エリーゼ:　それはお疲れ様でございました。それから改めて蜜月をお祝い申し上げます。よろしければミードをお持ちしましょうか？　お国の習慣は存じませんがこの村では旅行に出るお金もありませんので蜜月には村人みなでミード(蜂蜜酒)を頂いて過ごす習慣があるのです。

ルクレツィア:　それは素敵な習慣ね。ぜひ頂くわ。あとで宿へ届けて下さる？

エリーゼ:　かしこまりました。

村人たち:　(傍白)　やった、酒だ！　酒が飲めるぞ。女神様に感謝！

ルクレツィア:　それよりそちらの彼はあなたの良い人かしら？

エリーゼ:　(やや口ごもって)　幼なじみです。トリベルクで画家の徒弟奉公へ出ています。(傍白)　キーファ、ルクレツィア夫人にひざを折ってキスするのよ。

キーファ:　(取り繕って)　キーファです。蜜月をお祝いいたします、ルクレツィア夫人。(それからエリーゼに確認を取りつつ夫人の手にキスする)

ルクレツィア:　ありがとう。幸福な時節にあなたに出会えたことを神に感謝致します。それであなたはどのような絵を描きますの？

キーファ:　(こちらもやや口ごもって)　歴史画を――、領主様のお城で戦勝祈願の絵を描いておりました。

ルクレツィア:　その木板画は？　それがあなたの絵ではなくて？

キーファ:　そうです。(エリーゼを気にしながら)　ですが徒弟の僕に自分の絵なんてありません。
(なおも向けられる無言の要求に堪えかねて)　・・・あの、見てもらえますか？描きかけなんですけど。

ルクレツィア:　あなたさえよければ。

恭しく木版を渡して元の位置へ下がるキーファ。
エリーゼと見つめ合う。

エリーゼ:　(傍白)　ねえ、この子なんだけどあなたにも見えるわよね？　みんなには見えないみたいなの。あなた知ってる？

キーファ:　さあ。殿様たちと一緒にやって来たんだから殿様のお連れじゃないかな。

エリーゼ:　連れ子ってこと？　まさか。御二方とも初婚よ。
それにルクレツィア夫人にもお見えになっていないようなの。・・・孤児かしら？

キーファ:　君の名前は？

男の子:　パパ！

ルクレツィア:　(目の前のエリーゼと見比べて)　まあ、見ているこちらが赤くなってしまうほど情熱的な絵ね！　二人の会話がそのまま焼き付いたようよ。
・・・初心で不器用で、だけど敬虔な祈りに似て私欲や執着のない預けられた愛が彼女の全身にくまなく溶け込んでいるのが見えるわ。それは引き離そうにも決して引き離せないもの、あなたの信頼に満ちた表情を見ていると切実にそれを訴えているように感じるわ。

村人たちもこれに嘆声を上げて我が我がと覗き込む。
はにかんで目を背ける二人。男の子は二人の間に入って交互に
見上げたり、橋わたしに手を繋いでみたりして大いにはしゃぐ。

・・・ねえ、描き掛けのところ申し訳ないのですけど私にも一枚お願いできないかしら？　できれば私たちが滞在している間にお願いできます？

エリーゼ&キーファ:　(共に目を丸くして彼女を振り向き)　えっ、ルクレツィア夫人の絵をですか？　(それから二人で見つめ合う)

ルクレツィア:　ええ。ご迷惑かしら？

エリーゼ:　いいえ、光栄です！

畏れ多いという気持ちと夢のようだという胸の高鳴りとが入り混じるのをお互いの表情から確かめ合い、幸福なため息を漏らす。それから家具屋で愛の巣の飾り付けを相談する新婚夫婦のように彼に耳打ちする。

エリーゼ:　(傍白)　ねえ、キャンバスは持ってる？

キーファ:　いいや、無い。だって徒弟だもん。絵具だって持った事ないよ。

エリーゼ:　何をのんきな事を言っているの？　これはチャンスなのよ。
すぐに行って親方に頭を下げて借りてきなさいね。

キーファ:　親方だってきっと余分は持ってないさ。
・・・今はぼろ布だって不足しているんだから。

エリーゼ:　言い訳しないで。それでこのチャンスを棒に振るなんて私は許さないわ。
とにかく行って！　(背中を押す)

村人一:　おいどうした、女神様をお待たせしてはいかんぞ。

村人二:　絵の具が無いんだと。

村人三:　ぼろ布も無いって言ってるぞ。すぐに行って村中からかき集めてこよう！

ミツバチのようにうろつき回る村人たち。

ルクレツィア:　本当に愉快な人たちね。
キーファ、画材は夫に用意させますからあなたは色よいお返事を下されば
それでいいのよ。

　エマ、行って夫に画材を手配するよう言付かって頂戴。画面ももう決まっていますと伝えてね。
(再びキーファに)　私の夫も絵をたしなみますのよ。

エマ:　そこにいらっしゃいました。

ルクレツィア:　まあ、これこそ新婚のなせる奇跡なのね！　御姿を拝見したいと願えば
愛しい方がいつでも側にいらっしゃる、それこそ結婚の醍醐味ですわ。
　あなたたちにはずいぶんな仕打ちを受けましたからすぐにでも仕返しをしたいと思っていたのです。

　村長マクレガルを伴ってカールと下僕のオリバー、
そしてグレートヘンがやってくる。

ホルバイン:　やあルクレツィア、十分前の君よりも美しい人。

　満面の笑みで近づいて熱いキスを交わす二人。村人たちは初
めて見る貴人の情熱的なキスに嘆声を漏らす。純情なキーファ
とエリーゼは固まってしまう。

グレートヘン:　エリーゼ、あなたは見てはいけません。

ホルバイン:　ずいぶん情熱的なキスだね。何かあったのかい？

ルクレツィア:　そこの画家さんに侮辱を受けました。

マクレガル:　えっ、それは本当ですか？　私はグータッハの村長のマクレガルです。

私は彼の事をよく存じておりますが何かご無礼がありましたでしょうか？

　邪念のないまん丸の黒目を見開いてお人好しそうな顔で彼女に慰めの言葉をかける。新教徒らしい黒づくめの衣服に小さめのコルレット(ひだ襟)を着け、特注の十字架のネックレスと複数の木製の指輪を付けた装い。

ルクレツィア:　ええ、村長さんもこれをご覧になって下さい。彼ったら新妻の私にこんなものを見せ付けたのです。世界一の幸福に浸っている女性に対してそれ以上に愛されている乙女の像を見せるなんて。ねぇ、酷い侮辱でしょう？

ホルバイン:　これは・・・。確かに酷い。

　マクレガルとグレートヘンも覗き込み、前者は口元をほころばせ、グレートヘンは怨念を込めてそれを睨み付ける。

ルクレツィア:　でもどうか怒らないで下さいね。私、彼に肖像画を依頼したんです。もちろん芸術への奉仕の心からですよ。間違っても浮気心からでない事だけは信じて下さいね。私の中の女の部分が純粋に彼を求めてその熱い視線の前に現在の私をさらけ出してみたくなったのです。

ホルバイン:　ああ、なんて罪深い懺悔だ！　まるで禁断の果実を口にしてしまったイヴが夫のアダムにもそれを勧めるような口ぶりじゃないか。君は私に許しを乞わないばかりか、話すほどに瞳を潤ませ、ほおを赤らめてその深みにはまっていく赦しを求めているのだ。

ルクレツィア:　そうです、きっとそうなのですわ。女にとって愛されることと美しさへの追求は抗うことのできない魔性のものなのです。想像するだけで喜びが後から後から溢れ出し、恍惚の先に美の書物を開くことを夢見て夢中になります。もしかしたら私はあなたにさえ結婚前には触れさせなかったヘッドドレスを自ら解き放ってしまうかもしれません。けれど決して怒らないと約束して下さいね。

ホルバイン:　ああルクレツィア、君の目利きに懸けて誓おう。私たちの運命は左手の指輪で結ばれている。私もちょうどこれを見て君に彼のモデルを頼もうと思ったところだったんだ。

ルクレツィア:　まあ！　そんな所にも愛の奇跡が？　私たちは真実、神様から祝福されて結ばれたのですね。　(再び熱いキス)

横目でお互いの表情を探り合うエリーゼとキーファ。

エリーゼ:　(傍白)　・・・なんかすごく期待されているようよ。大丈夫？

キーファ:　自信ない。あんなに胸元の開いた服を見たのも初めてだし。

エリーゼ:　すけべ。あの方は色気だけの女性じゃないわ。

キーファ:　でもペチコートを描写するには女神さまの色気を克服しなくちゃならない。

エリーゼ:　女神さまなら克服しなくていいわ。内面の御美しさなら私が教えてあげる。

キーファ:　それがいいね。僕には眩しすぎてとても輝きの奥まで見えそうにないから。

マクレガル:　キーファ、エリーゼ。やっぱりお前たちが揃っているのを見ると私はほっとするよ。やっぱりお天道様はちゃんとご覧なっているんだね。いくらグレートヘンがほうきを振り回してお前たちを追っ払ったって神様が二人のつま先をほんの少し向き合うようにされるとたちまちまた寄り合って仲睦まじく話している。私らはみんなそんな二人の姿を見守るのが大好きで、お前たちが結婚してくれたらどんだけ嬉しいかと思っているんだよ。

キーファ:　「ヒルシュケーファー」・・・。

　これはクワガタムシという意味で先述した幼き日のキーファがヒーローに与えた最高の美名でいまや村人みんなに親しまれている愛称である。その特徴は真ん丸の黒目と喋るたびに上下

する上向きのひげ、細い手足、そして詰め物なしでもふくよか
な腹である。

ホルバイン:　キーファ、私の妻を描くというなら描くがよかろう。ただし油彩でだ。
画布と絵具は私が用意する。君の素質が本物で、ただ一度の描写の中に私も
知らなかった妻の表情を描き出すことができたなら相応の報酬を支払おう。

キーファ:　(表情を引き締めて)　はい、お願いします。

ホルバイン:　・・・それではキーファにはホルンベルクのゲミンゲン伯の居城まで来て
もらう事にしよう。ご両親は――

ルクレツィア:　あなた、私エリーゼの御宅で描いて頂きたいわ。
というのも実はあなたがいらっしゃらない間にエリーゼとミードをごちそ
うになる約束をしましたの。

一同タブーにでも触れたかのように驚嘆する。特にエリーゼ
は苦悶の表情をはばかりもしない。
しかしルクレツィアはそんな二人を見て微笑む。

・・・あなたご存じ？　グータッハでは結婚式があると村のみんなでお
祝いにミードを飲み交わすそうなんです。素敵でしょう！
それでせっかくのご縁ですから私たちもお祝いして頂きましょうよ。

ホルバイン:　それは確かに私たちのためにしつらえられた風習といっても過言ではないね。
だがこちらの伝統的な家々は我々がアトリエに使うと彼らの居住空間を占拠し
てしまいかねない造りなんだ。まずはご家族の意思を確認しなければ。

グレートヘン夫人、率直に言って頂いて構いません。ご迷惑ではありません
か？

グレートヘン:　(動揺を隠せない様子で)　ええ、大変光栄に存じます・・・。ですが夫に
聞いてみない事にはお返事いたしかねます。

マクレガル:　どうぞご自由にお使いください！　バーンスタインには私から話を通して

おきます。殿様方の晴れの日をお祝いできるなんて光栄至極、一晩と言わず一週間でも逗留してください。この村の連中はみんなお祭り好きのお祝い好きばかりですからね、にぎやかになりますよ。

「ヒルシュケーファー」の本領発揮である。

グレートヘン:　村長！

村人たち:　諦めろ、グレートヘン。「ヒルシュケーファー」の目が活き活きしちまってる。こうなったら誰にも止められないよ。

グレートヘン:　・・・。

ホルバイン:　ご厚意に感謝いたします。
聞け、我が忠実なる従者たちよ！　我々はこれよりグータッハに最大で五日間逗留する事とし、バーンスタイン宅にてルクレツィアの肖像の制作に入る！　ジークムント、お前は直ちにホルンベルク城のゲミンゲン伯を訪れて逗留地をグータッハに変更する旨を伝えてきてくれ。オットーはティティゼーの先方へその旨と故に到着の時刻が遅くなることを認めて郵送しておくように。トリベルクの領主の所へは明日私が行く。納める物をきちんと納めておけば直ちに刺客を送ってくることはないだろうが警戒は怠らないように。私の気紛れで負担をかけてすまないが皆よろしく頼む。

護衛隊:　若様の仰せのままに！

マクレガル:　おお、なんと壮観な号令だろう！　威厳があって的確でそれでいて部下への気遣いも疎かにしない。これぞ貴人の詔だ！

村人一:　あんたの号令とは大違いさ。いくら立派な角をわしゃわしゃやって脅かしたって黒丸お目めがおどけたがっているからね。威厳とは程遠いよ。

村人二:　話半分がいいとこさ。

マクレガル:　私もその気になれば顎は強いぜ。

ルクレツィア:　うふふっ。

村人三:　子守りでも手伝ってくれるってかい？　うちの子に高い高いしてやっておくれよ。

村人一:　思うんだがあんたは毛羽立ったストッキングを履くべきだよ。コール天の奴を。
　　ニットを履くなんて洒落すぎだい。

マクレガル:　何を言うか、これはクララ婦人が編んでくれたものだぞ。
　　コール天なんてボーデン湖まで行っちまえ！
　　さあ、行って客人と我々の恋人たちの希望を成就させようじゃないか！

　盛り上がる村人たち。それに呼応するようにキーファとエリーゼは自分の内に勇気がみなぎるのを感じていた。――ただし一方で母への敬愛も忘れておらず複雑な心境が渦巻いている。

　さあ参りましょう。

　村長に促されてバーンスタイン宅へ向かう一同。キーファとエリーゼは視線のやり取りによって自分たちの恵まれた環境に感謝し、芽生えた希望を喜び合う。男の子もそんな彼らの間ではしゃいでいる。その後ろでグレートヘンだけは不満を顕わにして彼らを睨み付けている。

ホルバイン:　いい村ですね。――そのおひげも。

マクレガル:　ええ、キーファのおかげです。彼が私に素晴らしい肩書きをくれたんです。

ホルバイン:　「ヒルシュケーファー」ですか？

マクレガル:　ええ！　おかげでずいぶん楽をさせてもらっています。

ホルバイン:　お羨ましい話です。私も彼にあやかれるでしょうか？

マクレガル:　心のやさしい青年です。彼が与えられる分に限ってはそれを惜しまないでしょう。

キーファ:　あのホルバイン様、お尋ねしたいことがあるのですがよろしいでしょうか？

ホルバイン:　なにかな？

キーファ:　この子は一体どちらのご子息でしょうか？

ホルバイン:　えっ・・・？

暗転。

第三場——同　バーンスタイン宅

さて、わずかな時間のずれが運命の歯車を回し、不遇の恋人たちの別離は首の皮一枚でつなぎ止められた。バーンスタインはもともとキーファにある程度の理解を示していたし、これをご縁に娘に縁談が舞い込めばとの目論見もあったので村長からの申し出に快諾、さっそく家族に一切の家具の移動を禁じた。
グレートヘン夫人もしぶしぶこれに従い、最初の一日ばかりは精神が折れてしまうかもしれない不安からふてくされてみせたものの、マレーに愚痴を聞いてもらったり料理や編み物を習っているうちに次第に落ち着きを取り戻し、昼の時間を比較的ストレスなく過ごすようになった。——ただし日が暮れて家に帰ると押し黙って家族と打ち解けた話をしようとせず、窓の方にも一切目をくれないようにしていたが——。

さて一方のキーファもこれで万事順風に乗ったわけではなか

った。最大の敵はしばしば味方の顔をしてやってくるからである。カール卿は目利きで財を成した家柄にふさわしくかねてより画家がモチーフから情緒的なインスピレーションを受ける瞬間というものを目撃してみたい願望があり、それをこの無名の絵描きで成就しようと考えていた。そこで動機は違うが多くの依頼者がするように画材の選択から構図の設定、モデルのポーズにいたるまで可能な限り最高の条件を揃えるよう努めた――つまり指定した――のだった。

右手にミード入りのグラスをもって窓辺に腰かけるルクレツィア夫人。腰壁で影になる部分はテーブルを寄せて隠し、透明の水差しが置かれている。画面右手前にはベッドが見切れており、後ろの壁にはカール卿がこれまでの旅で描いた風景画の一枚が飾られている。それらを格子窓からの自然光がやさしく照らしているという構図。椅子に肘掛はなくグラスにもエナメル彩こそ施されていなかったが、そこそこ都会的な物が揃えられていたので背もたれに夫人のローブを掛けるだけで間に合わせることが出来た。画面の外には下僕のオリバーと侍女のエマが控えている。

カール卿は忙しなく画家の後ろを歩き回り、時に彼の背中越しに人差し指を差し伸べて熱弁をふるっている。

カール:　うん、耳の色合いは良くなった。鼻の高さもそれでよい。しかしまだ手が絶望的に駄目だ。もっと活き活きと！　そのチップを貼り付けたような爪は何だ、後生だから爪にも血を通わせてくれ。

キーファ:　はい、マイスター！

カール:　――いやそうじゃない、それでは付け爪だ。私が言うのはそうではない。(ルクレツィアの側へ行って)　これが唇の弾力、これが頬の弾力、そして女性らしい髪の手ざわり・・・。同じように爪にも相応の官能性や質感があるはずだ。君にはそれを描いてもらいたいのだよ。

キーファ:　はあ・・・。

カール:　(もう一度頬に触れて)　少し疲れたかい？

ルクレツィア:　いいえ、あなた。平気ですわ。

カール:　休んだ方がいい、この花は余り長い時間情熱に当てられると却って弱ってしまうからね。それに彼も少し混乱しているようだ。
　キーファ、休憩にしよう。君もアイデアを整理する時間が要るだろう。次に私たちが戻ってくるまでに今私が言ったことを筆に伝えておいてくれたまえ。

・・・さあルクレツィア、立てるかい？

エマ:　奥様、裾をお持ちします。

ルクレツィア:　キーファ、目に見えるものだけに縛られてはいけませんよ。
(それから意味ありげな視線を送る)

キーファ:　(立ち上がってひざまずき)　恐れ入ります、ルクレツィア夫人。

ルクレツィア:　お願いね・・・。(そして微笑)

そして夫に手を引かれてアトリエを後にする。
しかしこの時のキーファにはその言葉に込められた真意を読み解くことはできなかった。大きくため息をついて床に座り込み、そのまま放心状態になる。
　とそこへすかさずエリーゼが入ってくる。手にははちみつ入りのミルクが入ったタンブラーと濡らしたタオル。

エリーゼ:　キーファ！
さあこれを飲んで、はちみつ入りのミルクよ。

　とミルクを飲む彼を不安げな顔で見つめ、それから帽子を取って頭に濡れタオルを乗せてやる。キーファはすぐにそれを顔までずらして天を仰いだ。

・・・少し楽になった？

キーファ:　うん、ありがとうエリーゼ・・・。

エリーゼ:　ホルバイン卿はずいぶんお厳しいようね。

キーファ:　(物憂げに頭を起こしてタオルを後頭部へ当てながら)　でもすごく勉強になる。
袖やペチコートの襞の量感とか肩に垂れた髪の動きとか・・・。
それに僕は今まで顔の一つ一つをあんなに丁寧に見たことが無かったから。

エリーゼ:　それはホルバイン卿が奥様のことをとても愛していらっしゃるからよ。
あなたもご一緒にいてそれは感じるでしょう？

キーファ:　うん。(手をかざして)　こんな距離で話していらっしゃるのを見るよ。
・・・ねえ、手を見せてくれる？

エリーゼ:　こう？

と手を取ってその弾力や爪の質感などを検め始めるキーファ。

ちょっとやだ、何？

キーファ:　殿様に爪にも血が通うように描けと言われたんだ。

彼女の手を弄ぶ彼の目は真剣そのものである。

エリーゼ:　(恥ずかしさに耐えきれなくなって手を引き)　それってそういう事じゃない
と思うわ。(それから初めて画面を見て)　ルクレツィア夫人の内面を爪からも
にじみ出るようにしろという事よ。

キーファ:　・・・夫人にもそんなことを言われたような気がする。

エリーゼ:　でも下絵の時よりはましになったわね。言っては何だけどあの時はブルータ

スの石灰像みたいだったから。

キーファ:　言えてる。
ねえ、ルクレツィア夫人ってどんな方？　君んちはミードを届けたんだろう。お酌もして差し上げたの？

エリーゼ:　(少し誇らしげに)　ええ！　バーデンバーデンで飲んだワインよりも美味しいと言って下さったわ。とっても素敵な方よ。お美しくて気品があって、とにかくこの世のすべての光はあの方を照らすためにあると言ってもいいくらいキラキラしていらしたわ。

　さらに上気するエリーゼ。キーファは目を閉じてそんな彼女の声に癒されている。

　・・・絹の立派なお召し物も夫人の透き通るような白いお肌の前ではなんだかごわごわして色褪せたものになってしまうわ。あの方自身が絹からお生まれになったのでなければきっとそんな風には見えなかったはずよ。
　ねえ、想像できる？　高級な生糸からできた御手が、肩が、首が、そして視線がまるで一つ一つの動作を見せ付けるように丁寧に繊細に動くのを――「洗練された」って云うのよ――。スープをすくう動作や扇で口元を御隠しになる姿、それに旦那様や「ヒルシュケーファー」さんの方へ向き直って熱心にお耳を傾けなさる様子まで何もかもが優美で真実でそれでいて気取ったところが少しも無くて・・・、私片時も目を離すことが出来なかったわ。
　そうしたらそんな私に気が付いてくださって――ねぇ、聞いてる？

キーファ:　うん、聞いてるよ。

エリーゼ:　それでね、私を側へ呼んでコルセットを褒めて下さったの！　私毎日これを着けるのが嫌でたまらなかったのにルクレツィア夫人が偉いわねって――。
　私とっても感動したわ。この世の中にあんなに完璧な女性がいらっしゃったなんて・・・、そんな方が私の事をちゃんと見て下さったなんて！！

キーファ:　それは幸運な夜だったね。君にも憧れの人が出来たんだ。

エリーゼ:　そうよ、ルクレツィア夫人は私の憧れ！　あの方のおかげでママが私に望んでいることがやっと分かったの。私もあんな風に洗練された女性になって楽し

い食卓に華を添えられたら――、その時はあなたをお抱えの画家として雇ってあげるからね。

キーファ:　期待しているよ。君ならきっとなれるさ。
でも君踊れるの？　舞踏会では民族衣装を着ないんだよ。

エリーゼ:　もちろんよ。それも少し習ったの。
見て。ららら～。

踊るエリーゼを心の底から愛おしそうに見つめるキーファ。
窓から入ってくる風や光や鳥の鳴き声さえ彼らの世界に入り込むと伴奏となって彼女のダンスに趣を添えた。
とそこへカール卿とルクレツィア夫人が戻ってくる。
驚いて立ち上がるキーファ。エリーゼの足も止まる。

ルクレツィア:　続けて。
(しかし彼女がはにかんでしまったのを見て進み入って)　よく覚えたわね。
まるでパートナーが見えるようよ。

エリーゼ:　恐れ入ります・・・。(照れて下唇をかむ)

カール:　君もリフレッシュできたようだね。私からも礼を言うよ、エリーゼ。
再開しようか。

キーファ:　はい、お願いします！

所定の位置に就く三人。

エリーゼ:　それでは私はこれで失礼します。

ルクレツィア:　あら、あなたもここに居ていいのよ。ねぇ、あなた？

カール:　ああ、構わないよ。そうしなさい。

エリーゼ:　いえ、私は失礼します。
　　(タンブラーとタオルを拾って)　それじゃキーファ、頑張って。

キーファ:　ありがとう、エリーゼ。

　夫妻に一礼して退室するエリーゼ。二人は見つめ合ってほほ笑む。キーファはすでに気力十分で画面に入り込んでこれまでの描写を洗い直している。暗転。

第四場——湖のほとり

　その後もたびたびエリーゼに励まされながら筆を進めたキーファは次第にカール卿の要求を越えた描画を見せ始め、かつてヴァンデルを圧倒した例の並はずれた表現力でカール卿をもすっかり閉口させた。そればかりか彼に指示された部分の変更を次々に申し出て卿をたじたじとさせる場面も多々あった。
　そして製作開始から三日目の朝ついにルクレツィア夫人の肖像画は完成し、あとは絵の具が乾くのを待つばかりとなった。

　・・・しかしそれでも彼の中には依然もやもやしたもの——後悔——が残り、心だけがアトリエに留まった。ために待ち構えていた多くの隣人たちからの真心の込もった労いにうまく応えることが出来ずそっけない態度でその場を立ち去ってしまう。そして独り歩いて手頃な水辺を探し、湖のほとりまで来ると大きくため息をついて寝転がった。
遠くで村人たちの陽気な笑い声や歌声。

キーファ:　・・・本当にあれでよかったのかな？

　目を閉じるとルクレツィア夫人のいろんな角度からの映像が映し出される。幾分見慣れたとはいえ未だ大人の女性の色気に圧倒されてどうしても彼女の内面へと潜り込むことが出来ない。

もしこれがエリーゼなら・・・。

　右手を天にかざし、頭をクリアーにする。それが微睡に近い状態になった時、暗闇の中からエリーゼの声が聞こえ始める。同時に残像が、言葉が、息遣いが、手のぬくもりが、後ろ姿が、横顔が、そして愛しさが次々と浮かんできてエリーゼの像を作り上げていく・・・。

　「お願いね」。ふいにルクレツィア夫人の声が割り込んでくる。その途端、彼の中で何かが覚醒した。にわかに起き上がった彼は木炭筆と木版を取りに家へ帰り、母の問いかけも隣人たちの陽気な声も心配の声も振り切ってあかね色に染まる道をひた走った。
　「もしかしたらまた親方の時と同じ過ちを繰り返してしまうかもしれない・・・」、一瞬そんなことが頭をよぎったが彼の足は止まらなかった。まっすぐ後ろへ伸びた影は今にもはためかんばかりだった。

第五場――バーンスタイン宅

　アトリエに入ると画架の前にグレートヘン夫人のシルエットがあった。彼女は不意を突かれた驚きと彼女だけにしか分からない敗北感から追い詰められた小動物のように身構えたが、彼が熱心にアトリエの使用許可を求め、本当に絵の事しか頭にない事が分かると意地を張っているのが馬鹿らしくなって一言二言嫌味を言って部屋を出て行った。

　夫人が出て行くとキーファは少し感傷的な気持ちになって無意識にキャンバスに残された彼女の思念を読み取ろうとしたが、間もなく置き去りにした心を取り戻して部屋に漂う残り香や椅子に残る残像、そして自身のイメージからルクレツィア夫人の面影を丁寧に拾い集めていった。描いては消し、また描いては消し、頭の中でシミのように広がる先入観を振り払いながらこれまで掴み切れなかった部分を慎重に発掘していく・・・。

　そんな彼らのやり取りを陰から窺っていたエリーゼはキーファの絵が母に伝わった事を見て取って一人胸を熱くした。そしてすぐにでも飛び出して行きたい気持ちを抑えて月夜に染まっていく彼の背中をそっと見守った。それから頃合いを見つけて明かりを手に静かに彼の空間へ滑り込んだ・・・。

キーファ:　(振り返りもせずに話し出し)　これでどうかな？　初めてお会いした日に君の絵をご覧になったルクレツィア夫人が見せられた表情を思い出してほしいんだけど。——ほら、僕たちの会話をそのまま映したようだと仰言った絵だよ——。
　君の憧れの人ってこんな感じだっけ？

エリーゼ:　(ごく自然に身を寄せて)　そうね、とてもよく描けているわ。
でもどうして？　絵はそこに完成したんでしょ。

キーファ:　湖のほとりで君を思い出したんだ。
僕たちは幼なじみだしお互いのことをよく知っているから君がそこにいなくたって描けるし、その絵に語りかけることだってできる。でもそれは夫人にとってはとても特別なことだったんだ。それで夫人は自分のこともそんな風に描いてもらいたいんじゃないかなって思って。

エリーゼ:　旦那様はお描きになれないの？　あんなに愛し合っていらっしゃるのに。

キーファ:　わからない。でも僕たちに求められたのは多分そんな絵だ。
だから君にも手伝ってほしい。何か思い出すことはない？

エリーゼ:　分かったわ。これはデッサンだから二人で描いたっていいわよね。
——そうね、この眼差しには壁を感じるわ。奥様は人と隔たりを設けるような

方ではないのに。視線を窓の外へ向けてみてはどうかしら？

キーファ:　外へ？　ちょうど郵便配達人の馬車が着いてお祝いの手紙と抱えきれない花束が届いたとかそういうこと？

エリーゼ:　違うわよ、旦那様が出掛けるのを見送られるのよ。シャンパーニュを傾けながら。満ち足りた夜を過ごされた翌朝で時間は十一時。夫の背中に幸福の余韻を重ねつつ押し寄せる憂鬱との葛藤に耐えていらっしゃるの。

キーファ:　まだそこに旦那さんがいるのにもう？

エリーゼ:　そうよ。大人の女性は複雑なの。

そこへカールが現われ、二人がいるのを見てとっさに扉の陰に身を隠す。

キーファ:　それじゃグラスは左手に持ち替えて右手は窓に触れた方がいいね。

エリーゼ:　駄目よ、どうして？　奥様は欲求不満ではないのよ。
屋根裏に愛人を匿っているのでもないわ。奥様を汚さないで。
・・・もう、何も分かってないんだから。

カールが吹き出してしまい、二人は驚いて扉の方を見る。
と同時にエリーゼは咄嗟に彼から離れる。

ホルバイン:　失礼。　(改めてノックする)

エリーゼ:　(キーファに傍白)　私行くわね。
(カール卿の脇を通り)　失礼します。

ホルバイン:　すまないね。　——やあ。私も絵が気になってね。

キーファ:　(立ち上がり)　あの、マイスター・・・！

ホルバイン:　いや、そのままでいい。続けてくれ。
(画架の前に立ち)　実に素直な絵だ。作画中は正直圧倒されてしまって私の絵は一体どうなってしまうのかと思っていたが、完成してみれば実に私の情熱に忠実でまったく注文通りの作品だ。

　先日トリベルク城でヴァンデル氏のフレスコ画を拝見したが――うん、君には第一に助手としての素晴らしい才能があるようだ。ために私はそこに自分が疎かにしていたものを発見することが出来た。ルクレツィアの華やかさを下支えする私自身の崇敬を・・・。
　しかし君たちはこれにもまだ満足できないと見える。

キーファ:　決してマイスターの意匠に不満がある訳ではありません。今度は奥様の視点で見直してみたくなったのです。奥様はどうして僕に肖像を依頼されたのだろう、どんな風に描いてもらいたがっていらっしゃるんだろう――そんな風に考えたのです。僕はマイスターほど奥様のことを存じませんので真実は違っているかもしれません、ですが僕にはどこか寂しさを秘めていらっしゃるように思えるのです。如何でしょう？

カール:　(差し出されたデッサンを断って)　いや、今度は君の創作を妨げることはしまい。完成したらルクレツィアと一緒に拝見するとしよう。バーンスタイン氏には私から言っておくから気の済むまでアトリエを使わせてもらいなさい。

キーファ:　ありがとうございます。

カール:　・・・それからこの村を出る心構えをしておきなさい。
君をフェルトベルクのフランツ氏に紹介しよう。

キーファ:　えっ・・・。

カール:　もうあそこにいられない事は君にも分かっているはずだ。
明日の午後にもご両親の所へご挨拶に伺わせてもらう。いいね？

キーファ:　・・・はい。

この名誉ある申し出にキーファは喜びよりも不安に駆り立てられた。エリーゼとの別離の時がいよいよ訪れようとしていたからである。エリーゼも壁を隔ててこれを聞いており、拠り所もなくその場に座り込んで泣き伏した。

・・・二人きりになった家は何とも言えない静寂に包まれた。やがてエリーゼが帰って来ないとグレートヘン夫人が騒いで彼女の捜索が行われ、すぐに見つかってマレーさんの家へ連れて行かれた。村人たちは二人の事情(慕情)をたいへん良く知っていたので誰もキーファが乱暴したとかそんな風に考えた人はなかったが、娘が泣いていたことを知って何かあった事は間違いと察したグレートヘン夫人は努めて理解ある母親の顔をして娘にその訳を尋ねた。しかし長年娘の脳裏に刻みつけてきた人格がそう簡単に書き換えられるはずもなく、エリーゼは彼が成功したことだけを告げて再び枕に顔をうずめた。それが彼女にできる最大の強がりだった。
対してキーファには母ミンスが食事と燭台用の油を持って世話に当たり、息子の思うところを尋ねた。しかし彼は一心不乱に才気を振るうばかりで何も答えなかった。彼は今夜のうちに自分一人で描き上げられる自信を確立しておく必要があったからである。母もそんな彼の焦りや決意をなんとなく察して長居しようとはせず退室する前に一言、明日殿様が家にあいさつに来ることを告げられるとそれですべてを聞いたつもりになって了承し、そして家へ帰っていった。

・・・数時間の眠りの後、エリーゼはようやく起き上がって部屋を見回した。二つの家族の者たちは口々に何事か彼女に声を掛け、トリッシュがはちみつ入りのホットミルクを持ってきた。彼女はぼおっとする頭でそれを受取り、半分だけ飲んだ。溶け切っていないはちみつがどろっと口に入ってきて、ピリッと来る刺激と絡みつく強い甘味に促されて思考を再開した。

「キーファ…」　彼女の頭に数時間前の彼の姿が映し出される。途端に彼の隣にいない自分を責める気持ちが強く湧き立つ。彼女は転がるようにベッドを降りた。そして母親の制止も聞か

ず、燭台も持たずに彼の許へ急いだ。

エリーゼ:　キーファ！

　我が家に駆け入り、祈るような声で彼の名を呼ぶエリーゼ。キーファはまだそこに居た。窓際で月明かりを浴びて膝を抱えている。デッサンは一人で完成させ、もう帰って眠るばかりになっていたが、エリーゼが感じたのと同じようにこのまま彼女と話さないまま今日を終えてしまったら二度と会えなくなるような気がして帰ることが出来なかったのである。

キーファ:　(やおら立ち上がり)　エリーゼ・・・。

エリーゼ:　(扉を一歩二歩入った所で立ち止まり、敢えて核心をそらして)　絵は出来た？

キーファ:　うん。　・・・見てくれないの？

エリーゼ:　見なくても分かるわ。あなたはすごい画家だもの。

キーファ:　殿様が、僕に村を出る心構えをしておくようにって。

エリーゼ:　・・・うん。聞いていたわ。ごめんなさい。

キーファ:　そう・・・。それで戻ってこなかったんだね。
　　僕がフェルトベルクへ行っちゃうと思った？

エリーゼ:　(母の言葉が頭をよぎる)　もしかして行かないつもり？
　　駄目よ、そんなこと。だってあなたは——

キーファ:　行くよ。僕はフェルトベルクへ行く。エリーゼがくれたチャンスだから。

進み出た彼の顔は暗がりで見えなかったがそのシルエットは決

意と自信に充ちていた。エリーゼの頬は赤らみ、みるみる涙があふれてくる。彼女は今ほど目の前にいる男性を愛していると思ったことはなかったし、手放してはいけないと思ったこともなかった。
　キーファもシルエットでそんなエリーゼを感じ、駆け寄って彼女を力強く抱きしめた。体温は高潮し、小刻みに震えている。

・・・四年したら必ず帰ってくる。グータッハに、エリーゼの傍に必ず帰って来るよ。

暗転。

　この夜、彼らは初めてのキスをした。唇から伝わるぬくもりが身体中を駆け巡って二人の体温が同じになったのを覚えている。それから一つのシーツにくるまって夜が明けるまで話した。
　――幼き日のキーファが村の集会で慣れないビールに酔っぱらって誰彼かまわずキスをしエリーゼに求婚したこと、家が貧しいためにエリーゼのお下がりを着せられて近所の同級生たちにからかわれた事、彼が午前中は教会で読み書きと算数を習い、午後はエリーゼの家へ行って家庭教師をした事、しかし文法はエリーゼの方が覚えが早かった事、雪深い冬の日に初めて木彫りに挑戦したエリーゼが刃物でケガをして大騒ぎになった事、彼女を慰めるためにキーファがマリア様の像を彫って皆を驚かせた事など・・・。
　それから彼が見続けてきたあの空想の事も初めて彼女に打ち明けた。エリーゼはその話に直観が働いて例の彼らにしか見えない男の子のことを思い出し、彼が二人の事をきっと守ってくれるはずだから彼が現われた時にはできるだけ親切にすることを誓い合った。

第六場――シュヴァイツァー宅

　翌日、ルクレツィア夫人を伴って改めてバーンスタイン家を訪れたカール卿は完成した二枚の肖像画をご覧になって大変感動された。そして彼らの礼儀に従ってキーファに金貨五十枚の破格の報酬をもって報いられた。その門戸は村長を始め村人たちにも開かれていた為、彼らは大いに驚嘆し、歓喜した。
「ヒルシュケーファー」と母ミンスなどはほとんど気が狂わんばかりに狂喜し、孝行息子に抱き付いて何度も何度もキスをした。そしてこの金貨を見れば仕事へ行ってしまった夫も必ず息子を見直すだろうし、遍歴に出ることも許すに違いないと上気して話した。・・・ただしその場にエリーゼとグレートヘンは姿を現さなかった。

　彼らはその日の仕事などそっちのけで祝宴を催し、二時間も経つ頃には主賓さえそっちのけで昼間から飲む酒の旨さに酔い痴れた。女たちもこの日ばかりは無礼講で表に出て楽しい会話を楽しんだ。
　そしてその日の夕暮れ、カール卿は約束通り母子の案内で彼の父シュヴァイツァーを訪れ、帰宅を待つあいだ裏の空き地でキーファが自作しているという木炭筆の制作過程を見学して過ごした。今日には必要な物を自作するという習慣が無かったので卿は大いに興味を持ってそれを眺められた。
　・・・そこへシュヴァイツァーが帰宅してくる。

シュヴァイツァー:　まったく怪しからんな、大の男が毎日毎日昼間から酒を食らってほっつき歩いているというのは。この村はいつから酔っぱらいの村になったんだ？

ミンス:　みんな村にお殿様がいらしたのが珍しいんですよ。あなたも村長さんの家に新婚の木が飾られているのをご覧になったでしょ。それにキーファの成功が重なったんです。みんな御二人のことが大好きであの方々の後をついて村を眺めるとピカピカ(新品)に見えると言っていますよ。(上着を脱がす)

シュヴァイツァー:　そりゃよそ者の目で村を見直したからだ。――といって俺たちが
ピカピカ(豪奢)の暮らしをしているとは言わんがね。ビールをくれ。

帽子を取りながら大儀そうに妻をたしなめる。そして右手の
勝手口に目を遣り、火床に吊られたスープ鍋が湯気を上げてい
るのを確認するとほっと一息ついてテーブルの上座に着く。

・・・ブイヨンの匂いまでしやがる。息子を兵隊に取られるのに
肉を食って祝うとは大した母親だよ、おまえは。

ミンス:　(上着をツリー型のコートハンガーに掛けつつ)　嫌ですよ、あの子は絵描きとし
て殿様に認められたんです。兵隊なんかに取られやしません。

シュヴァイツァー:　ならお前はフェルトベルクがどこの事だか知っているか？
山の名だよ。スイスとの国境にある。
・・・何だこれは？

ミンス:　何だと思います？　ちょいと開けてごらんなさいな。

シュヴァイツァー:　気味の悪い声を出すんじゃない。
(袋を引き寄せる)　何だこの重さは？　なにやら嫌な予感がする。
えい、鎮まれ俺の心臓！
(それから袋の口紐を解いて)　おい、お前とうとうやらかしたのか！

ミンス:　(ビールを注ぎながら)　だから違いますよ、それはあの子の稼ぎです。
お殿様がキーファの絵をお買いになったんです。

シュヴァイツァー:　嘘を言うな、だってこれは金貨じゃないか！

ミンス:　そうですよ！　みんなが見てる前でポンとお出しになったんです。
あたしゃあんなにキスされたのは結婚式以来ですよ。

シュヴァイツァー:　・・・金貨なんて初めて見た。冗談みたいな色をしているな。
本物か、これは？

ミンス:　もちろん本物ですよ。決まってるじゃありませんか。それを下さったのは正真

正銘のお殿様ですよ。　(ビールを置く)

シュヴァイツァー:　(ビールを飲んで)　見ろ、ビールよりまだ黄色い。
・・・しかし近頃は太っ腹になったもんだな。三叉も構えた事の無い若者に金貨を出すなんて。

ミンス:　まあ、まだ疑ってるんですか。殿様はあの子の絵に感動なさったんです。
軍人のスカウトじゃありません。奥様なんて涙を流してあの子の手にすがりつかれたんですからね。「この手には神様が宿っています」って。

シュヴァイツァー:　それじゃなんでそんな山奥へ連れて行くんだ？
そこまでお気に入りなら手元に置いて死ぬまで肖像を描かせればよいものを。

ミンス:　そこに殿様のお知り合いの画家が住んでいるそうなんですよ。
元々結婚の報告に伺う予定があった所にキーファを連れて行って下さるっていうんですよ。

シュヴァイツァー:　嘘だ嘘だ。モデルは魔法使いでお客は山賊か？
ついでにキャンバスは鱒のウロコだ！

ミンス:　あなた！　あの子は本気なんですからね。

シュヴァイツァー:　それが本気なら俺は今すぐあいつを牧師にするよ。金ならある。
だいたいどうしてこんな物を受取ったんだ？　返してきなさい。

ミンス:　嫌ですよ。私はもうみんなと大喜びしてしまったんですから。
今さらどんな顔をして返しに行けというんです？

シュヴァイツァー:　バカな女だ、お前は。殿様の身なりと場の雰囲気に流されて犬っころみたいに何でもかんでも頂戴してきやがって。犬のように返して来い。

ミンス:　まあ呆れた！　そんなに言うならあなたが返して下さいな。今お呼びしますから。

シュヴァイツァー:　何、来てるのか？

ミンス:　昨日そう言ったでしょ。もう裏の空き地にいらしてますよ。
飼い犬の粗相をあなたが謝って下さいね。

キーファ！　お父さんがお帰りになったわよ。殿様にお入りになってもらって。

シュヴァイツァー:　(取り乱して立ち上がり)　ちょっと待ちなさい、俺は聞いてないぞ！
とりあえず上着だ、こんな恰好じゃ犬の散歩にも行けやしない。

ミンス:　帽子もね。とにかくあの子の転機を邪魔するような事だけは言わないで下さいね。やっと串刺し公のお城から解放されるんですから。

シュヴァイツァー:　はは、何だそれは？

ミンス:　親方の絵ですよ。壁画の区画を割り振られるとあの子はいつも串刺し死体やら骸骨の練習をするんです。私たちには何も言いませんけどあの子はその事で長く悩んでいたみたいですよ。

シュヴァイツァー:　未熟者はみんな優男だ。理想ばかり高くて情け深い。
牛が可哀そうだと軛を曳かず、羊が可哀そうだと尻を打たず、雌鶏が可哀そうだと卵を採らず、豚が可哀そうだと屠殺を直視できない。
それでどうして生きていくというんだ？

ミンス:　あの子はそれを絵に描いて生きて行くんですよ。さあいらっしゃいますよ。

勝手口よりカール卿とキーファが入ってくる。

ホルバイン:　(振り返ってお供の者たちに)　お前たちはここで待て。

キーファ:　お帰りなさい、父さん。

シュヴァイツァー:　ああ、ただいま。
(帽子を取って)　ごきげんよう、殿様。どうも見苦しい家へお越しくださいまして。

ホルバイン:　御機嫌よう、シュヴァイツァーさん。ご挨拶が遅くなって申し訳なく存じます。(握手を求める)
　この村の牛肉を頂きました。味付けは素朴ですが脂の新鮮さと香り高さは産地ならではの贅沢ですね。ステーキもローストビーフも最高でした。

シュヴァイツァー:　それはどうも。私たちは滅多に口にする事がありませんのでそうしたお褒めの言葉がたいそうなチップになります。
　この度は結構なお話を頂いたそうで。ですがこれはお返しいたします。勤労の教えに反します。

ホルバイン:　それは失礼致しました。しかし我々の礼儀にもご思慮願います。
私も妻も本当に彼の絵に感動したのです。

シュヴァイツァー:　そこの所がよく分かりません。息子はまだ徒弟の身ですよ。
殿様のような目の肥えた方をうならせる物が描けるでしょうか？

ホルバイン:　御言葉を返すようですが人が感動するのに作者の経歴は関係があるでしょうか？　よい師匠の下で学べば才能のつぼみはより強く大きく育ち、そのほころび始めにさえ人の目を引き付けてやまない魅力を持つことがある、と以前祖父から教わったことがあります。——大輪ですからその開花は一層困難になりますが——。

シュヴァイツァー:　私にはそういったことは分かりませんが妻の話ではそれほど良い師匠ではないそうで・・・。

ホルバイン:　徒弟修業を単なる通過儀礼で済ませなかった点で彼は最良の師匠です。
ですから私がこちらへ導かれたのも神の啓示だったと受け止めております。

シュヴァイツァー:　・・・少し息子と話をさせて頂けますか？

ホルバイン:　もちろんです。彼の意思であなたのご理解を頂かなければ意味がありません。

ミンス:　さあさあ、立ち話もなんですからとりあえず座って下さいな。
何もありませんがビールをご賞味ください。ホップの入らない自家製ですのよ。

ホルバイン:　頂きます。

　席に着き、テーブルの中央あたりからスープの垂れた跡が自分に向かって続いているのを見てしまう。思わず吹き出してしまいそうになり軽く咳払いしてタンブラーでそれを遮断する。

シュヴァイツァー:　お前も座りなさい。今日の木炭の出来はどうだね？
本当は絵筆や顔料を買ってやれればいいんだが。

キーファ:　十分だよ。僕は外で描くのが好きなんだ。

シュヴァイツァー:　室内画を描くのは苦痛か？　親方とはだいぶ趣が違うらしいが。

キーファ:　親方にはよくしてもらっています。僕の絵も認めて下さっているし。
・・・僕がわがままになっているんだと思います。もっと描きたい、もっと描けるはずだって。

ミンス:　キーファ・・・。
さあさ殿様、これはうちの塩漬け豚で作ったスープです。お口に合いますか分かりませんが息子のお祝いに拵えましたのでどうぞ一口だけでもお召し上がりください。

ホルバイン:　頂きます。(とスープに手を付ける)

シュヴァイツァー:　工房に入って今年で何年になる？

キーファ:　八年目です。

シュヴァイツァー:　ならばお前がそう思うのも無理はない。俺も木彫りの仕事を覚えた頃にはそんな事を考えた時期もあった。きっとどんな職業でも一度は感じるものだと思う。——それで師匠を変えれば、新天地へ行けばより良い自分が見出されるはずだと考えたわけか。

キーファ:　はい。ごめんなさい、僕の為に苦労を掛けていたのに。

シュヴァイツァー:　それはいい。その事で家族が不幸になったと感じた事は無いからな。だがお前はそうじゃなかった。好きな仕事に打ち込んで希望に充ちた毎日を送っているものとばかり思っていたが、実際はこの村を出なければならないほど思い詰めていたんだ。
　・・・しかしそんな目に遭ってもやっぱり画家なのか？　木彫りではいけないのか？　俺としては木彫りの方が販路も安定しているし、お前が夏の間も工芸品を作ってくれたら母さんを独りにしなくて済むから有難いがな。

キーファ:　木彫りももちろん好きです。父さんやニコや村のみんなとわいわい話しながら一緒に作業をするのは楽しいし、本当に大切な時間を過ごさせてもらっていると思います。　・・・でも、僕の思いを形にしてくれるものはやっぱり絵しかないんです。母さんのこともちろん心配だけど僕には描くことでしか誰も幸せにすることはできないから――。

シュヴァイツァー:　思いとは？

キーファ:　心です。人が見たものや感じたことを言葉で表すように僕は絵でそれを表します。木彫りは僕を無心にさせる事しかできません。

シュヴァイツァー:　わからなくはない。だが仕事とはそういうものだ。いつもお前の思い通りという訳にはいかない。実際ライナルトはどうなった？　家出同然に家を飛び出したはいいが、あれから六年の間まったく音沙汰がない。あいつとしても故郷に錦を飾る計画があって旅立ったのだろうが、結局もっとも近寄りがたい村になってしまった・・・。
　だがそれは決して珍しいことじゃない。特に今はこのご時世だからな、お前にも十分に起こり得ることだ。

キーファ:　はい。

シュヴァイツァー:　・・・私はなにもお前が成功しないことを願ってわざわざ旧教の町の工房へ入れてやったわけではない。フェルトベルクにお前を理解してくれるお師匠さんがいてそれを他ならぬ殿様から紹介してもらえるというなら私たちとしてもとても喜ばしいことだ。

――しかし殿様、なぜフェルトベルクなんです？　ハイデルベルク

ではいけないのでしょうか。私はただの無知な農民に過ぎませんがそれでもこの子が言うような”思い”で生計を立てられるような仕事はないことぐらいは知っています。依頼者が旧教の殿様ならなおのこと、私たちの教義に反する絵を描かなければならない時もあるでしょう。
　その方は新教徒の方ですか。なかなか破天荒な暮らしぶりをなさっているようですがお仕事に関してもそのように破天荒でまかり通っているのでしょうか。

ホルバイン:　・・・いいえ。ですが祖父の代から巨匠と呼ばれている方です。
名はフランツ・シュリッテン、年の頃は四十五で我が敬愛するペーター・パウル・ルーベンスと同じ生まれです。シュリッテン家は代々木工職人の家系でティティゼーに住居があり、ホルバイン家とは曾祖父の代から交流があります。ティティゼーの生家には両親と妻と五人の子が暮らしており、冬には彼も厳寒を忘れる楽しい団欒に加わります。それ以外の季節にはフェルトベルクの山小屋にひきこもり、妻のカロリーネ夫人が週二回、自家製の荷車を三時間走らせて食事を作りに行くそうです。画材の補充や洗濯物の取り換えもその時に。

ミンス:　まあ、それは大変ですわね。お子様たちもさぞ寂しがっていることでしょう。
ではお殿様がフランツ様とお知り合いになったのも家具の注文が御縁で？

ホルバイン:　いいえ、祖父の使いで絵の注文に伺ったのが始まりです。これはご本人には内緒ですが、我が家では広いフェルトベルクの森を独りで訪れて巨匠にカンバス画を発注してくることが成年の通過儀礼になっているのです。
　しかし彼はとても耳が良いらしく、こちらの気配を察するとクモの子を散らすように暗い藪の中に身を隠してしまわれるので初見の者が一日二日で彼にお会いするのは至難の業といわれています。それにたとえ彼の後ろを取ったとしても創作中に話し掛けられる事を何よりもお嫌いになりますので、へそを曲げられては取り合ってもらえません。巨匠とのコンタクトには細心の注意を払う必要があるのです。

ミンス:　ふふふ。その方って、言っては何ですけど偏屈な方ですね。こちらはクマの研究者みたいじゃありませんか。足跡をたどってこれはオスで体重は何キロだとかこっちはメスで子連れだとか。それでふいに遭遇すると驚いて追い返されるんでしょう？　なんて可笑しい方でしょう！　――ねえあなた？

シュヴァイツァー:　・・・。

ホルバイン:　巨匠は立ち去るときに少量のフンを残して行かれるんです。
それがまたたいへん芸術的で。実際土を掘り返して持ち帰った使者がいたとかいなかったとか・・・。

母子に笑いが起こる。

　かく言う私も当時は見事に追い払われてティティゼーの生家へ助けを求めました。ですので今度もうまく話を進められる保証はございません。

ミンス:　まあ、それでうちの子なんかが突然押し掛けて行ってお弟子にして頂くことなんてできますでしょうか？　そんなに偏屈でいらしてお弟子さんはいらっしゃいますの？

シュヴァイツァー:　こら、人をそんなに偏屈偏屈と言うものじゃない。少し黙りなさい。
　――お話は分かりました。ですが殿様、なぜキーファなんです？
この子はうちの大切な跡取りで一人息子なんです。両家の次男のように易々と冒険に出せるような子ではないのです。
それに私はどうしても疑ってしまいます。私も父から「うまい話には刺がある」と教えられてきましたから。これは私らのような貧民には一番の教訓です。私らの財産なんてものは綿みたいなもので子どもも家も仕事も殿様方のほんの気まぐれな一吹きで簡単に失ってしまうのです――しかもある日突然――！

ミンス:　あなた、やめて下さい。殿様に失礼ですよ。
(懸命に取り繕って)　お殿様、何卒ご無礼を御許し下さい！
主人は息子を思うあまり心にもないことを口走っているのです。
決してお殿様に逆らう気持ちで申したのではありません。

ホルバイン:　結構です。心配はごもっとも、一人息子を失えば家が絶たれるというのはどこも同じです。私とて派手な身なりと金貨を見せて、ましてや祝宴ムードで煙に巻いて一方的に話をまとめようというつもりはありません。信じろというのもまた烏滸がましい。ですからこうしてご挨拶に伺いました。
　しかしなぜと問われるならば彼の絵を見てやってくださいと答えるよりありません。確かに心で成り立つ仕事はないかもしれませんが、お客は悉く心

を動かされてそれを欲するものです。それは絵画でも木彫りでも布きれ一枚でも、それにあなたが大切に育てられている牛でも一様に変わりないはずです。

シュヴァイツァー: (タンブラーを鳴らして)　・・・ミンス、ビールのお代わりを頼む。

ミンス: はい。
(ビールを注ぎ足して)　あなた？

ホルバイン: あなたはキーファを誇りに思うべきです。彼は素晴らしい画家です。

シュヴァイツァー: (ビールを飲んで一息)　・・・そんなことは殿様に教えられなくても知っています。私はキーファの父親なんですから。
　こんな私でもやっていけてる世の中です、その息子が認めなられないことがあるとすればそれは世の中が気まぐれを起こしているに違いない——、人の親なら誰でもそう思うものでしょう。

キーファ: 父さん——。

ホルバイン: はい。　失礼しました。

シュヴァイツァー: キーファ、支度をしなさい。ミンスも。
パウロと和解しに行こう。

声を躍らせて手を繋ぎ合わせる母と息子。

ミンス: さあ、一張羅を引っ張り出してこなくちゃ。虫に食われてなきゃいいけど。

母と息子は軽やかに奥のタンスへ踊り行く。

シュヴァイツァー: 殿様には礼を申さなければなりません。エリーゼとのことがあってパウロとはもう二年ほどまともに会話をしてこなかったんです。

だからこそあれには早くまともな仕事に落ち着いてもらいたかったんですがね。あいつはあくまで「自分の仕事で」認められようとし、私はそれを先進的だと突っ撥ねてきたんです。これでは和解のきっかけが掴めなかったのも無理はありません。

ホルバイン:　我々は福音主義を信仰するようになって寛大さを手に入れることができました。彼の意思もまた我々と同じくらい尊重されるべきなのです。

シュヴァイツァー:　その通りです。

　彼につられて意識なく二人の方を見遣る。しかしちょうどミンスが頭巾を外して髪があらわになっているのを見てしまい、すぐさま目をそらす。

シュヴァイツァー:　殿様方はこれからティティゼーへ参られるんですよね。
いつまでそちらへ？

ホルバイン:　(軽く動揺して)　情勢次第です。
両家の両親も恐らくそれを見越してこの時期に式を挙げさせたのだと思います。　・・・本来なら一個小隊を率いて首都防衛の前線に立たなければならないのですがね。

シュヴァイツァー:　誰にも責められませんよ、こんな戦況では。
ここもいつまで持つか・・・。

ホルバイン:　エリーゼも連れて行ってやれればいいのですが・・・。

シュヴァイツァー:　難しいでしょうな。
殿様、この金貨は殿様が持っていて下さいますか？　あの子らに将来の選択肢を残しておいてやりたいのです。然るべき時が来たらあなたから渡してやって下さい。ここはホルンベルクの殿様の庇護下にありますが、私らの城塞はあまりに脆い。

ホルバイン:　わかりました。お預かりします。

暗転。

　ふいの幸福に見舞われた二家族はこの夜何年かぶりに食卓を囲んだ。そして空白の時間がまるで長期の旅行でもあったかのようにその思い出話を競って語り合った。
　しかしそんな楽しい団欒の中、エリーゼは一人ひどく思い詰めた顔をしていた。恋人との別れに未練があるからではない、彼の描写によって頂点に達したルクレツィア夫人への崇拝が言いようのない胸騒ぎを呼び起こしたからだった。
　使用者がキャップをひねった時にしか香ることを許されない香水瓶のような人生――そんなエリーゼにとって自ら香りをまとって往来を練り歩く夫人の御姿は拘束から解き放たれた一人の人間そのものだった。彼女は夫人に会って初めて女性という人間に出会ったのである。この巡り会わせは彼女にとって天啓と言ってよいものであり、虚空に手を伸ばし続けた彼女が初めて触れた手がかりだった。それを見失うことは彼女の淡い、あまりにも揮発しやすいアイデンティティーに深く関わる重大事のように思われた。

　「神様は私に最初で最後のチャンスを下さった。今日という日を逃せば私は一層美しくなるだろう、すなわち母の巧みな裁縫技術によって寸分の狂いなく病的で青白い顔をした繊細な淑女へ仕立てられることだろう。
　さて沈黙を貫いて淑女になるか、あるいは事を荒立ててエリーゼになるか・・・」

　キーファは苦悩する彼女の横顔を最初誤解していた。彼女の母親も娘のこの表情に注目していたが、おそらくキーファだけがその本心に気が付いた。それはため息の後の一瞬の瞳の輝きにはっきりと表れた。
　叶うものならすぐにでも彼女の手を引いて夫人の許へ連れ出してやりたいと彼は思った。けれどここで再びグレートヘンを刺激すればエリーゼの希望がまたも邪推されて今度こそ完全に

分厚い暗雲に覆い隠されてしまう・・・。彼は悟られないように努めて自分の表情を抑制した。それでもごく自然に彼女をちら見するときには熱烈な励ましの視線を送り、やがてそれは通じた――。
　彼女はおもむろに立ち上がり宣言する、
　「決めたわ、私ルクレツィア夫人の侍女になる！」

　その夜、村は再び大騒ぎとなった。それはエリーゼが出発の準備に追われるホルバイン夫妻の宿の扉を叩いて彼らを驚かしたとか、案の定発作を起こしたグレートヘン夫人が往来で泣き叫んで娘に考え直すよう哀願し、親切な隣人たちが彼女に同情するべくわらわら出て来たというだけの微笑ましい青春物語で済まされる話ではなかった。
所によっては生まれながらに各人の職業が決定され、故郷を出る事が領主から固く禁じられているような時代にあって結婚前の村娘が自分の意思で仕事を決め、自分の意思で故郷を旅立とうとしているのである。人々は男も女も入り混じって彼女の行動について議論し、子どもたちは訳も分からず明かりを縫って走り回った。
　「ヒルシュケーファー」はとりあえずエリーゼを(応接室の)控えの間に待機させ、村の役員たちを集めて役場で会合を開いた。

　そんな中キーファは茫然を装って部屋に残り、誰もいなくなったのを確認してから一人テーブルの下で拳を握った。
ニコの批評が当たっていなかったことがとても誇らしかった。母ミンスも主人たちと一緒に出て行くふりをしてそんな彼の姿を眺め、二人の成長を素直に喜んだ。――この子たちは明日この村を発つ。私たちは親としてそれを快く見送ってやらなければならない。涙などを見せて彼らの出足を挫くことは断じてあってはならない・・・。そんな決意をひそかに胸に刻むのだった。

第七場――バーンスタイン宅

　ハネムーン一行の出発の朝。昨夜の騒動の余波が続く村は色めいていた。宿から教会へ続く村の本通りには一番鶏が鳴くより早くから村人たちが花道を作っている。
　中にはエリーゼの新教徒らしからぬ軽率な行動と駆け落ちを許したその父に対する不信感を夜中じゅうベッドの中で募らせ、ついには我慢をきたして無言の非難者として彼らの家その隣家の前に集合する者もあった。それは舞台の開演を待つ短気な観客と旅巡業の役者の関係さながらで、立場の弱い出演者たちは早々に支度を済ませてともかく客前に姿を現さなければならなかった。

グレートヘン:　・・・巧くやったものね。そんなに私の傍に居るのは嫌だったのかしら？

エリーゼ:　誤解しないで。これは花嫁修業よ。

グレートヘン:　あなたこそ。私は褒めているのよ。あなたはチャンスを掴んだの。

　トリッシュをどかしてコルセットの紐を締め上げる。
苦痛に耐えるエリーゼ。

――しっかりお仕えしなさい。

そこにノック音がしてバーンスタインが入ってくる。

あなた、お仕着せ中ですよ！

バーンスタイン:　すまないが匿ってくれ。皆にせっつかれて居た堪れなくなったんだ。
残念だがエリーゼの事をよく思わない者も多くあるからな。
――おはよう、エリーゼ。昨夜はよく眠れたかね？

エリーゼ:　おはよう、パパ。昨夜は興奮し通しだったわ。
今朝はルクレツィア夫人のお声で目覚めたのよ。

バーンスタイン:　それをよく覚えておくことだ。これからは奥様より早く起きてお声が掛ればどこからでも御用聞きに伺わなければならないのだからね。
　しかし私は嬉しかったよ、お前の勇気のある所を見られて。私たちが望んでも決して口にできなかったことをお前は実行して見せたんだ。
そしてチャンスを掴んだ。キスさせておくれ。お前は私たちの自慢の娘だ。
(ハグ&ビズ)

グレートヘン:　・・・何が自慢なものですか。この子はキーファと別れたくない一心でハネムーンの一行に加わることにしたんですよ。おかげで残される私たちはしばらく火の粉の始末に追われなければならないわ。

バーンスタイン:　そういう言い方はよしなさい。エリーゼはお前のしつけが的確だったからこそ本物にお会いしてすぐにそれと見抜くことができたのだよ。
さあキスさせておくれ。君のお手柄だ！　(ハグ&ビズ)

エリーゼ:　(大げさに身振りを付けて)　お母さまにはとても感謝しています。
お母さまは私にルクレツィア夫人のようになれと仰言っていたんですね。
これまではどうして私だけがこんな目に遭わなければならないのって一人部屋で泣いたこともありましたし、コルセットを恥ずかしいとも思っていました。
　けれどルクレツィア夫人とお会いしてお母さまの教えが正しかった事が分かると暗い気持ちがぱっと晴れたんです。——お母さまが私の事を信じてくれている、誰よりも私の事を愛し、誰よりも私を分かってくれているお母さまが私に田舎娘から貴族夫人へと駆け上がる夢物語を期待してくれているんだわって！
　そう思ったら私、——とても大それたことだけど——私みたいなおてんば娘でも奥様のようになれるかもしれないってとても勇気が出たの。

グレートヘン:　ああ、もうたくさん！　芝居がかった事を言わないでちょうだい。

バーンスタイン:　ああ、なれるとも。私もグレートヘンに劣らずお前を愛しているし、信じてもいるよ。

エリーゼ:　だからねお母さま、聞いて？　私はお母さまの言うような向こう見ずを起こしたりしないわ。キーファは四年したらグータッハへ帰ってくると私に約束し

てくれたの。だから私もその間に出来ることをしておかなくちゃ。
・・・お母さまに二人のことをちゃんと認めてもらえるように。

バーンスタイン:　ああエリーゼ、お前たちはもうそんな話までしていたのかい？
それもとても勇気の要る決断だったね。
・・・グレートヘンも本当は認めているんだ。お前とそのことについてもっと話したかったんだよ。母と娘で秘密を共有し合って一緒に温めて行きたかったんだよ。お前には分かるだろう？

エリーゼ:　ええ。　——ごめんなさい、ママ。

グレートヘン:　(強情になって背を向け)　・・・せいぜい夢を見ているといいわ。そして美しくおなりなさい。殿様方の御眼に留まるように——。
さあ早くローブを着て髪を整えなさい。主人に呼ばれて出て行くようではいけませんよ。　——あなたも出て行ってくださいな。

バーンスタイン:　じゃあ先に出ているよ、エリーゼ。　(キス)
(外の熱気に当てられて)　うわっ、みんな蜂のように唸っているな。
ミードを振る舞って舌を喜ばしてやらねば。
トリッシュ、エリーゼの支度が済んだらこっちも頼む。

トリッシュ:　かしこまりました、旦那様。

熱気を遮るように腕を前に出しつつ家を出て行く。
途端に表でやじが飛ぶ。暗転。

第八場——トリベルク　ヴァンデル宅

その頃キーファは遍歴に出る事と工房を辞めることを告げるために出勤前のヴァンデルを訪ねていた。応接室(兼リビング兼ダイニング)では妻と五人の子どもたちが眠っており

小さな客人用のレストルームに通されて工房の仲間たちと
五日ぶりの再会を果たす。キーファの話を聞いた四人の態
度はそれぞれで親方は険しい顔で考え込んでしまった。

ニコ:　君は本当にすごい奴だよ。君が絵をやめるはずがないとは思っていたけどまさか
貴族夫人の肖像を描いているとは夢にも思わなかった。

キーファ:　君が背中を押してくれたからだよ。それに運がよかったんだ。

ニコ:　僕はエリーゼに告白しろって言っただけさ。それがたった五日の間に殿様から
求愛されることになるなんて。一体どこまでつまずいて行ったんだよ。

キーファ:　まだその最中さ。弟子にしてもらえるかどうかはお殿様にも分からないらし
いから。

ニコ:　それでも殿様のお墨付きがあればもう怖い物なしだよ！
君は新教の町でも立派にやっていける。・・・でもエリーゼとはお別れだね。

キーファ:　うん。でもエリーゼもグータッハを出るよ。
ルクレツィア夫人の侍女になったんだ。

ニコ:　ええっ！　いったいどこからそんな話になったんだい？

キーファ:　直談判。(笑)　家とエリーゼの家族とで久しぶりに食事をしてね、その席で突然
席を立って言ったんだ、「決めたわ、私ルクレツィア夫人の侍女になる！」って。

ニコ:　うわー、それは気の毒だね。でもエリーゼらしいや。

マテウス:　君たち盛り上がるのはいいけどフェルトベルクって何処のことか知ってるの？
山の名だよ。ははは。その人って何て名だっけ？　新教の間では巨匠で通って
いる画家らしいけど結局町を追われて世捨て人になった偏屈爺さんじゃないか。
――まあ今の君にはお似合いか。ははは。

ニコ:　マテウス、また君か。彼に嫉妬しているのかい？　自分が知らないというだけで
人を蔑むのは君のよくないクセさ。少なくとも徒弟の君よりは立派な画家だよ。

マテウス:　それは認めるよ。でなきゃ家柄が良いんだ。けど画家は依頼されて描くのが仕事なんだから町に拠点を置くのが普通だろう。山奥で好き勝手なものを描いて客に買い付けに来いなんて傲慢だし身勝手だよ。そんな人はどうせ世間離れしたものや奇をてらったものを描いて人を驚かしている手合いに決まってる。
　そうですよね、マイスター？　僕ならそんな画家の所へなんか頼まれても弟子入りに行きませんよ。

ヴァンデル:　お前の言うのは一昔前の宗教画家の理屈だ。時代は芸術のすそ野を市民へと広げ、画家を外へ外へと連れ出している。キーファがその流れを感知して行動を起こしたとしても何ら不思議はない・・・。

ペーター:　それにお前が目くじらを立てる事ではないだろう？
これでお前の位置を脅かす者がいなくなるんだ。

ニコ:　そうさ、君は彼が帰って来るのが怖いんだ！

マテウス:　怖いもんか！　僕はいつだって受けて立ってやる。
恋人連れで遍歴に行く奴なんかに負けるもんか。

キーファ:　一緒じゃないよ。僕たちは別れるんだ。

驚いて彼を見遣る三人。

マテウス:　嘘を言え。だって彼女も今日発つんだろう。
なんたってハネムーンなんだから。

キーファ:　うん。でも一緒じゃない。僕は駄目だったらグータッハに帰って来るし・・・。
父さんと村長さんの所でお世話になるんだ。

ニコ:　それって絵をやめるってこと？

キーファ:　うん。でも木炭画は続けてもいいって。

ニコ:　殿様のお抱え画家にしてもらえばいいじゃないか。そうしたらエリーゼとだって一緒に居られる。それに報酬を使って遍歴に出ることだって――。

キーファ:　それはできない。できないんだ・・・！

急に深刻化する話に動揺しヴァンデルを見遣るペーター。

ニコ:　どうして！　エリーゼはティティゼーに居るんだろう?　どうして一人で帰ってきたりするんだよ。エリーゼは君の傍に居たくて村を出るんじゃないのか！

キーファ:　それは違う。僕たちは別れなくちゃいけないんだ。
それで四年間はそれぞれの人生を頑張るって二人で決めたんだ。

ニコ:　・・・だって君、エリーゼと結ばれるために今まで頑張ってきたんだろう？
今ならそれを叶えられるじゃないか。グレートヘンさんだって君のことを見直してくれたんだろう？　だったら――。

キーファ:　だからなんだよ、きっと。エリーゼがルクレツィア夫人と出会ってやっと
僕たちは始まりの位置に立つことが出来たんだ。こうなってやっと僕たちは
頑張れるようになったんだよ。

ペーター:　マイスター、このままではキーファは本当に・・・。

ヴァンデル:　あいつが決めた事だ。それにうまくいっても四年したら帰って来るんだろう？　そうしたらこいつとは依頼者を争う事になる。こっちも今から死に物狂いさ。なあ、キーファ？

キーファ:　・・・そうなると思います。

ペーター:　キーファ！

マテウス:　おっと、キーファが師匠に宣戦布告だ！

ヴァンデル:　とっとと行っちまえ！　お前の表現は俺の画面を取り過ぎる。俺だってい

つまでもお前の背景の位置に留まっているほどお人好しじゃないぞ。今度の壁画でそれを証明してやる。お前はお前で広い世界を見て打ちのめされてきやがれ。俺の名が慰めてやろうから。

キーファ:　親方・・・。
今日までお世話になりました。(涙)

ヴァンデル:　まったくだ、お前には骨の髄までしゃぶり尽くされたよ。(肩を抱く)
・・・涙を流す時さえ生意気をやりやがる。(涙ぐむ)

同じく彼に寄り添うペーターとニコ。マテウスは少し離れた
所で腕組みをして彼なりにライバルとの別れを惜しんでいた。暗転。

(C)2015 Seita.Mogami, All Rights Reserved.